

一般社団法人 日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第27号 (通巻第55号)

体育心理学専門領域

2015年7月発行

一般社団法人 日本体育学会体育心理学専門領域会則

- 第1条 本会は、一般社団法人日本体育学会 体育心理学専門領域と称する。
- 第2条 本会は、体育・スポーツに関する体育心理学研究の発展のため、会員相互の情報交換を行い、研究と実践を推進することを目的とする。
- 第3条 本会は、第2条の目的を達成するために次の事業を行なう。
- (1) 研究会の開催
 - (2) 会報の発行
 - (3) 会員の研究に資する国内、国外の情報収集と紹介
 - (4) その他、本会の目的に資する事業
- 第4条 本会の会員は、本会の趣旨に賛同する者で、会費を納入した者とする。
- 第5条 本会に次の役員を置く。
- (1) 会長 1名
 - (2) 理事 12名
 - (3) 監事 2名
- 第6条 役員を選出は、次の方法で行なう。ただし、末位が同数の場合は抽選とする。
- (1) 会長は、会員の単記無記名投票による最多得票者とする。
 - (2) 理事は、会員の5名連記無記名投票による得票上位者10名とする。
選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する。
 - (3) 理事長は、理事の単位無記名投票による最多得票者とする。
 - (4) 監事は、会員の中から会長が委嘱する。
- 第7条 役員任期は、4月1日より翌々年の3月31日までの2年間とし、2期の重任を限度とする。ただし、事務局選出の理事はこの限りでない。
- 第8条 本会に理事会を置き、会長および理事でもって構成する。
- 第9条 理事会には、業務を円滑に遂行するため、次の委員会を置く。
学会大会委員会、企画委員会、広報委員会、庶務・会計委員会
ただし、庶務・会計委員会は、事務局選出の理事が担当する。
- 第10条 会務を補佐するため、会長の指名により幹事若干名を置くことができる。
- 第11条 本会の会議は、総会および理事会とする。
- 第12条 総会は、次の事項を審議決定する。
- (1) 役員を選出
 - (2) 事業報告および収支決算
 - (3) 事業計画および収支予算
 - (4) 会則の改正
 - (5) その他
- 第13条 総会は年1回、日本体育学会の開催地で開催し、当日の出席会員をもって構成する。
- 第14条 本会の経費は、会費、日本体育学会の補助金ならびに寄付金の収入によって支出する。
- 第15条 本会の会費年度は、日本体育学会終了日より翌年の体育心理学専門領域総会までとする。
- 附則
1. 本会の事務局は、総会の議を経て決定し、移転する。
 2. 本会は、日本体育学会の依頼により、日本体育学会関連役員等を選出する。
 3. この会則は、平成21年8月27日から施行する。
 4. 平成24年4月1日より、日本体育学会が一般社団法人に移行したため法令により、「体育心理学専門分科会」を「体育心理学専門領域」と改称し、本会則の名称を「体育心理学専門領域会則」と改称する。

体育心理学専門領域の役員

任 期：平成27年4月1日～平成29年3月31日

会 長：阿江美恵子

理事長：関矢寛史

理 事：学会大会委員会（○土屋裕睦，北村勝朗，内田若希，工藤和俊）

企画委員会（○杉山佳生，兄井 彰，西田 保）

広報委員会（○森 司朗，荒木雅信，山本裕二）

庶務・会計委員会（武田守弘，田島 誠）

○委員長

監 事：木島章文，田村 進

幹 事：中本浩揮

事務局は広島県東広島市鏡山1-7-1広島大学大学院総合科学研究科・関矢寛史研究室とする。

一般社団法人 日本体育学会

体育心理学専門領域会報

第27号 (通巻第55号)

体育心理学専門領域

2015年7月発行

巻頭言

体育心理学専門領域「会報」(第27号)の刊行によせて

体育心理学専門領域会長 阿江美恵子

体育心理学専門領域は、平成27年の日本体育学会第66回大会で専門領域の中で最多の発表の申し込みがありました。これは、多くの会員の体育心理学の研究に対する関心の高さであると、誇らしく思っております。

さて、私は本年度から専門領域の会長をお引き受けたいしましたが、体育学会の理事を務めて3期目になります。平成25年度からは「まさか」の副会長となり、特別委員会を含め3つの委員会で活動することになり、現在の体育学会全体を知ることができました。

とはいえ、会員6000名余を抱えた大組織である体育学会は、フットワークが重たく、何をしているかわからない、というのが一般会員(社団法人です)で、正確には社員)の感想ではないかと思えます。活動をわかりにくくしているのは、専門領域選出の代議員の中から互選で理事が決まり、その理事は専門領域独自の理事会とコンタクトがないせいではないかと考えています。

体育学会の理事会は昔のように名誉職ではなく、社会に向けて体育・スポーツの情報発信をすることが責務となっております。体育学会は2020年東京開催のオリンピック・パラリンピック直前のスポーツ科学会議を主催することになります。専門領域ごとに日本でのオリンピック・パラリンピックムーブメントを世界にアピールし、スポーツ科学研究をリードすることになるでしょう。優れた多くの研究が世界に発信される大きなチャンスだと思います。

次に、専門領域の研究に対して感じていることを少しまとめました。

学校体育の学習指導要領の問題や指導者資格の問題は、体育学会が、教育と競技スポーツを学問的に検討できる唯一の組織であることの証と考えられます。

体育心理学専門領域は、松田岩男先生の時代から、

体育教育に大きく貢献して参りました。体育心理学の研究内容が体育教育から、様々に広がっていることは仕方のないことですが、体育・スポーツ教育の知識を身につけずに体育心理学を研究することは戒めねばならないと考えます。体育心理学の「心」の研究は、体育・スポーツの環境を理解したうえで解釈されなければ、正しい結果にならないと思います。心だけ切り離して研究することの危うさを感じています。

それから、質問紙調査など大量のデータの収集や、実験条件の設定、臨床面接研究も研究倫理の遵守が厳しくなりました。研究者を志す若い皆さんには、研究結果を上手にまとめるだけでなく、研究者として研究する目的、意義を常に考えて研究に向かわれることを期待しております。そして、先輩の先生方には、研究倫理の徹底をお願いするだけでなく、発想の豊かな研究を、体育・スポーツ界にたくさん送り出すことにご尽力頂きたいと思えます。

今後とも、専門領域の活動にご協力をお願い致します。総会にぜひ出席してください。

体育心理学専門領域会報 第27号
目次

巻頭言	i
目次	ii
I. 日本体育学会第65回大会関連	
1. キーノートレクチャー1	
題名：体育・スポーツにおけるリーダーシップの心理学：海外研究の動向	
司会：磯貝浩久（九州工業大学）	1
演者：町田 萌（順天堂大学）	2
傍聴記：筒井 香（奈良女子大学大学院）	3
2. キーノートレクチャー2	
題名：体育学習における動機づけ研究の課題	
司会：土屋裕睦（大阪体育大学）	4
演者：伊藤豊彦（島根大学）	5
傍聴記：来間千晶（広島大学大学院）	6
3. シンポジウム	
題名：チーム力の研究：その視点と方法を探る	
司会：佐々木万丈（日本女子体育大学）	7
演者：河津慶太（九州大学）	8
スポーツチームにおけるチームパフォーマンス予測モデル	
演者：横山慶子（工学院大学）力学系としてみたスポーツの「チーム力」	9
演者：飛田 操（福島大学）	10
グループ・パフォーマンス研究から「チーム力」を考える	
傍聴記：小笠希将（鹿屋体育大学大学院）	11
4. 口頭発表（座長報告）	
座長：東山明子（畿央大学）	12
座長：山本裕二（名古屋大学）	13
座長：豊田則成（びわこ成蹊スポーツ大学）	14
座長：中本浩揮（鹿屋体育大学）	15
座長：佐々木万丈（日本女子体育大学）	16
座長：土屋裕睦（大阪体育大学）	17

5. ポスター発表記	
発表者 1 : 小岩 瑤 (日本大学大学院)	18
発表者 2 : 沖 和砂 (順天堂大学大学院)	19
6. 大会参加記	
大会参加記 : 西田順一 (群馬大学)	20
II. 研究会の活動報告	
スポーツ社会心理学研究会 : 杉山佳生 (九州大学)	21
メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会 : 高妻容一 (東海大学)	22
運動学習研究会 : 増澤拓也 (琉球大学)	23
臨床スポーツ心理学研究会 : 中込四郎 (筑波大学)	24
スポーツ動機づけ研究会 : 川田裕次郎 (順天堂大学)	25
III. 研究室紹介	
研究室紹介 : 村山孝之 (金沢大学)	26
IV. 学位論文紹介	
萩原悟一 (日本経済大学)	28
兄井 彰 (福岡教育大学)	30
畝中智志 (杏林大学)	32
V. 海外情報	
三浦哲都 (東京学芸大学大学院)	34
山越章平・片上絵梨子・實宝希祥 (大阪体育大学大学院)	36
VI. 日本体育学会第66回大会関連	
日本体育学会第66回大会案内	38
VII. 事務局報告	
平成26年度日本体育学会体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録	39
平成26年度日本体育学会体育心理学専門領域 総会議事録	41
体育心理学専門領域 新旧理事会議事録	44
平成27年度日本体育学会体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録	45
資料1 平成26年度決算報告書	48
資料2 平成27年度予算案	49
編集後記	

I. 日本体育学会 第65回大会関連

司会報告

磯貝浩久（九州工業大学）

岩手大学で開催された日本体育学会の体育心理学専門領域キーノートレクチャー1は、順天堂大学の町田萌先生に「体育・スポーツにおけるリーダーシップの心理学：海外研究の動向」というテーマでお話し頂きました。

町田先生は、高校を卒業後に渡米され学士（カリフォルニア州立大学）、修士（マイアミ大学）、博士（ミシガン州立大学）すべてをアメリカの大学で取得されています。ミシガン州立大学の博士課程に在籍されている頃に、AASPなどの学会でたびたびお会いしましたが、英語の堪能さはもちろんのこと、気さくにまた穏やかにいろいろな研究者と話されていた姿が印象に残っています。8月に東京で開催されたASPASPでは、荒木香先生とともに、Gould先生、Gill先生、Hodge先生といった著名な先生達とシンポジウムもされました。このようなキャリアを持たれている町田先生は、リーダーシップの海外研究の動向を解説していただく適任の先生だったと思います。

レクチャーでは、まずリーダーシップに関して、「個人が集団の掲げる共通目標の達成に影響を与えるプロセス」といった定義を確認されました。その後、「効果的なコーチング」、「コーチ行動」、「コーチによる動機づけ雰囲気」、「コーチ・選手関係」、「ユースのコーチング」、「スポーツ指導者のキャリア」、「スポーツチームのリーダーシップ」、といった幅広いトピックスに関して、これまでどのような研究が行われてきたかをわかりやすく説明されました。そして、ご自身が行なっているコーチング効力感に関する研究内容を紹介され、最後に、これからリーダーシップ研究の方向性について示されました。

特に印象に残っているトピックスとして「コーチ行動」があります。欧米の研究では、コーチ行動を説明するためにコーチング効力感、自己決定理論、多次元的リーダーシップモデルなど主として5つの

理論が用いられてきたこと、コーチング行動を分類するために「スポーツのリーダーシップ尺度」など沢山の評価方法が開発されてきたことなどが報告されました。さらに、コーチのパワーや選手のナショナルリズムといった、コーチングの調整変数やプロセスに着目した研究が欧米での現在のトレンドになっていることが指摘されました。

また、これからのリーダーシップ研究については、リーダーとリーダーシップを明確に区別して、プロセスに着目して研究すること、理論を基盤にした研究を推進すること、リーダーの国際性を育成していくこと、リーダーの育成に関する個人要因と環境要因を明らかにしていくことなどを主張されましたが、そのどれもが確かに重要だと実感しました。

最後に、日本においてスポーツのリーダーシップ研究は、近年大変滞っていると感じていましたので、今回のレクチャーを機に、リーダーシップに関する研究が活発に行われるようになることを期待します。海外の動向を分かりやすくレクチャーして頂いた町田先生、会場にお越しいただき熱心に話を聞いて頂いた皆様に心より感謝申し上げます、座長報告と致します。

演者報告「体育・スポーツにおけるリーダーシップの心理学：海外研究の動向」

町田 萌（順天堂大学）

第65回日本体育学会大会において、スポーツにおけるリーダーシップ研究について、キーノートレクチャーを行った。体育・スポーツの現場で、優れたリーダーシップはチームの重要な成功要因と広く認識されている。リーダーシップとは、一般的に個人が集団の掲げる共通目標の達成に影響を与えるプロセス（Northouse, 2001, p. 3）と定義され、体育・スポーツにおいて、体育教員、スポーツ組織（JOCや各スポーツ団体など）のリーダー、スポーツ指導者・監督、スポーツチームのリーダー（キャプテンなど）等、様々な形のリーダーが影響を与えると考えられる。今回のキーノートレクチャーでは、スポーツ指導者、そしてスポーツチームのリーダーに焦点をあて、海外研究の動向を追った。また、自身の国内外におけるリーダーシップに関する研究の紹介を行い、これからのリーダーシップ研究の展望について発表を行った。

まず、スポーツ指導者のリーダーシップに関しては、Horn（2008）のコーチング効果予備モデルを紹介し、実際のコーチ行動のみでなく、選手やコーチの特徴、期待、価値観、信念、社会文化的コンテキスト、組織環境、選手のコーチ行動への認知などの、相互的な影響を考慮する必要性を説明した。また、コーチ行動に関しての主な理論やコーチ行動の評価方法の紹介も行った。さらに現在のこの分野の海外研究のトレンドとして、コーチが選手に影響を与える過程や、その過程における調整変数を明らかにすることを挙げ、またコーチによる動機づけ雰囲気に関する研究、コーチ・選手関係、ユースのコーチング、スポーツ指導者のキャリアに関する研究を紹介した。スポーツ指導者のキャリアに関しては、自身の米国大学アシスタントコーチを対象とした研究についても発表を行った。一方、スポーツチームのリーダーシップに関しては、未だ論文数は少ないが、現在は増加傾向にあることを説明した。また、この

分野の研究で頻繁に使用される理論と、これまでの研究で挙げたスポーツチームのリーダーの特徴、影響、発達・成長に関しての知見を紹介した。さらに、現在自身が行っているスポーツチームのリーダーシップに関する質的研究の予備結果の発表を行った。

これからのスポーツにおけるリーダーシップ研究に関しては、まず「リーダー」と「リーダーシップ」を明確に分けること、さらなる理論の発達・構築のために理論を基盤にした研究を行うこと、リーダーの国際性の育成に関する検討、リーダーの成長・育成に関する個人・環境要因や、介入方法に関する研究を進めていくことを提言した。現在、日本のスポーツ心理学において主流でない研究分野であるにも関わらず、キーノートレクチャーの参加者からはこの分野の研究への興味を感じた。今後、スポーツ心理学内外の研究者と協力しながら、日本でリーダーシップ研究の発展に寄与していきたいと考える。



演者：町田萌先生（順天堂大学）

傍聴記

筒井 香 (奈良女子大学大学院)

チームスポーツであるサッカー部のメンタルトレーニングに携わっていることもあり、リーダーシップへの強い関心を抱き、町田先生のキーノートレクチャーを拝聴致しました。初めに佐々木先生よりアメリカで博士号を取得され、海外雑誌への論文投稿も精力的になさっているといった町田先生のご紹介がありました。私は現在博士課程3年目で、英語論文の投稿と向き合っているタイミングであったことから、関心がより高まったことを覚えています。今回は1時間という短い時間にも関わらず、最新のリーダーシップ研究に関する濃密なレクチャーでありました。

まず、先生はリーダーシップの定義「個人が集団の掲げる共通目標の達成に影響を与えるプロセス」を示されてから、海外研究の動向について、スポーツ指導者のリーダーシップとスポーツチームのリーダーシップという二つの観点から説明されました。スポーツ指導者のリーダーシップでは、コーチング効果予備モデルを示し、効果的なコーチングとしてのコーチ行動やコーチによる動機づけ雰囲気、コーチと選手との関係の必要性が説明され、チームという集団に与えるスポーツ指導者の影響の強さを改めて実感しました。例えばコーチと選手の関係がポジティブなものであるかネガティブなものであるかといった違いは、チーム全体の動機づけを大きく左右します。指導者がチームに対して与える影響が良いものであるためには、指導者自身のウェルビーイングやキャリア発達が欠かせないことも同時に示され、選手だけではなく、指導者も含めて一つのチームであることを強く感じました。

続いて、スポーツチームのリーダーシップでも、先生はその定義「選手が共通のチーム目標の達成に向けて、チームメンバーに大きな影響を与える相互作用のプロセス」を示された後、関連論文の紹介をなされました。スポーツの発展に伴い、現場が心理

学を求めることも多様化し、その結果、研究も発展すると考えられます。2010年以降、スポーツチームのリーダーシップに関する論文数が増加傾向にあるということから、現場が今回のキーノートレクチャーのテーマである「リーダーシップの心理学」を求めているのだらうと思いました。また、スポーツチームのリーダーの特徴、影響、発達に関する説明があり、多方面からスポーツチームのリーダーを捉えることができました。

最後に、理論構築の必要性やリーダーに必要な資質の一つである国際性の育成、そしてリーダーの育成・成長に必要な個人要因や環境要因に関してなど、これからのリーダーシップ研究の展望をお話頂きました。「育成」というワードから、リーダーシップというものは環境要因により後天的に育っていく部分が大いように感じ、私が携わっているサッカー部の指導者が「リーダーシップのあるキャプテンになるように種を蒔く」とおっしゃっていたことを思い出しました。

今回のキーノートレクチャーを通じて、非常に多くの論文をご紹介頂きました。自分自身がこれだけしっかりと多くの論文に基づき、スポーツ心理学について他者に伝えることができるだろうかと考えたとき、自身の勉強不足を痛感しました。このような気づきを与えてくださり、また、携わっているサッカー部での経験を理論に基づいて捉え直すきっかけを与えてくださった町田先生に感謝申し上げます。ありがとうございました。

司会報告

土屋裕睦（大阪体育大学）

体育心理学専門領域では、例年2題のキーノートレクチャーを実施してきました。1題は新進気鋭の若手研究者に、そしてもう1題はベテラン研究者にご担当頂き、学会員の学びの場としてきました。後者にあたるキーノート②は、島根大学教授、伊藤豊彦先生に、「体育学習における動機づけ研究の課題」と題してご講演いただきました。会場は大盛況で、体育学会会長でバイオメカニクスがご専門の阿江通良先生（筑波大学）はじめ、体育心理専門領域以外からもたくさんの会員が来ていただきました。

伊藤先生は言うまでもなく動機づけ研究のエキスポート。スポーツ社会心理研究会の代表者のお一人で、研究会メンバーを中心に「体育教師のための心理学」を監訳し、大修館書店より刊行されています（2006）。他にも「よくわかるスポーツ心理学」（ミネルヴァ書房、2012）や「生涯スポーツの心理学」（福村出版、2011）等のご著書があります。

それに加えて今回、伊藤先生にキーノートをご依頼するにあたり、私達専門領域の学会担当委員には良い予感がありました。実は、伊藤先生が磯貝浩久先生、西田保先生らと共著で執筆し、体育学研究第58巻に掲載された「小学生の体育学習における動機づけモデルの検討：動機づけ雰囲気への認知、学習動機、および方略使用の関連」が学会賞に選ばれるのではないか、という期待でした。くしくも、前日の総会で伊藤先生に対する学会賞受賞が発表され、レクチャー当日はさながら学会賞受賞講演のような雰囲気を味わうことができました。

先生のお話は、どうして動機づけの研究をしたのか、という先生ご自身の研究に対する「動機」の紹介から始まりました。教員養成学部の課題として、教育実践力を持った教員を育てるために、動機づけ研究は重要なテーマであると述べられました。そして、①動機づけ理論の概観の後、②体育実践における動機づけ研究の難しさへと展開されました。そこ

では、「学習意欲理論の問題点」「動機づけ理論の実践場面への適用の難しさ」に加え、先生ご自身の体験（研究の個人史）も踏まえながら、「理論と実践場面の狭間」についてお話がありました。そして最後に③研究の課題・方向性について紹介があり、「ボトムアップ型研究」「環境要因の検討」「相互作用の視点」「体育学習における目標の多様性への対応」のような、今後の研究を刺激する、示唆に富む様々な視点が提示されました。

レクチャーは終始和やかな雰囲気で行われました。会場に詰め掛けた聴衆の多さに若干戸惑われたのか、少しおちゃめな大先輩は、「緊張しますね」などとおっしゃりながら、ご自身の教師としての経験等も交えた心温まるレクチャーが展開され、あっという間の1時間でした。

全体を通じて、先生のご研究は「体育教師はいかにあるべきか」という一貫した問いへの真摯な取り組み、という印象が強く感じられるレクチャーでした。特に、「体育授業におけるクラスの動機づけ雰囲気は、教えている先生の影響が強い！」というお言葉はまさにその通りであり、体育を専門とする私達への暖かくも厳しい励ましの言葉になりました。

何よりこのレクチャーを通じて、私のように「よし、また明日からまた頑張ろう！」と「動機づけ」られた体育教師はきっと多かったに違いないと思います。体育心理専門領域のキーノートにふさわしいレクチャーだったと思います。

演者報告「体育学習における動機づけ研究の課題」

伊藤豊彦（島根大学）

体育学習における動機づけ研究は、児童・生徒の学習行動を説明し、理解し、あるいは促進させる上で重要な意味を持っていることから、これまで、認知、感情、欲求、環境などに着目した多くの動機づけ理論が提唱され、検討されてきました。

しかしながら、実際の授業場面では、児童・生徒個人々の動機づけは教師や仲間などの重要な他者から影響を受けるだけでなく、協同学習や評価の在り方など多様な要因が相互に関連して進められることから、動機づけ理論に基づく研究は授業実践に十分な貢献をしてこなかったという指摘があります。

これに関して、鹿毛（1999）は、学習意欲理論の問題点として、①二項対立的であること、②要素主義であり、個人を統合体として把握していないこと、③質的側面よりも量的側面を重視していることを上げています。さらに、学習意欲を高めるための一般化された教育方法を導くことの難しさに関して、学習意欲は、①場との相互作用によって生じ、②不安定で「波」があり、③その質と量に個人差が大きいことも指摘しています（鹿毛、2007）。一方、動機づけ理論の実践場面への適用の難しさを指摘したブロフィ（2011）は、動機づけ理論が自ら選択した活動を自由に行う場合に最もあてはまるのに対して、①学校の出席は義務であること、②教師は多くの児童・生徒への対応を求められること、③教室での失敗が個人的落胆や社会的困惑をもたらす社会的状況であること、④成績やパフォーマンスが序列化されること、などの問題点を指摘しています。

本キーノートレクチャーでは、動機づけ研究を取り巻く上記の問題意識を背景に、最近の主要な動機づけ理論である達成目標理論（Achievement Goal Theory:AGT）と自己決定理論（Self-Determination Theory:SDT）に触れながら、体育実践に貢献する動機づけ研究の方向性として、以下の4点を指摘させていただきました。

1. 理論の枠組みから実践を検討するトップダウン型研究に加え、多様な要因が関与する実践場面を重視したボトムアップ型研究が必要ではないか。

2. 児童・生徒個人を対象とした研究に加え、動機づけ雰囲気、自律性支援的行動といった動機づけを高める学習環境要因に着目した縦断的(介入)研究が必要ではないか。

3. 児童・生徒の個人差を変数単位(variable-based approach)で捉えるだけでなく、交互作用的視点、すなわち統合体として捉える個人単位(person-based approach)の分析から動機づけの効果を検討することが必要ではないか。

4. パフォーマンスの向上のみならず体育学習の課題に対応した多様な動機づけ(たとえば、社会的動機づけ)の研究が必要とされるのではないか。

以上はあくまで私見ですが、本キーノートレクチャーを契機に、体育実践に貢献する動機づけ研究がさらに行われることを期待しています。最後になりましたが、このような機会を与えていただきました中込会長始め学会大会委員会の先生方、司会でお世話になりました土屋先生、ご清聴いただいたフロア一の皆様にお礼申し上げます。



演者の伊藤豊彦先生（島根大学）と司会の土屋裕睦先生（大阪体育大学）

傍聴記

来間千晶（広島大学大学院）

第65回の学会も最終日を迎え、演者を迎えて行われる最後の発表は伊藤豊彦先生のキーノートレクチャーでした。この日の体育心理学専門領域総会にて、伊藤先生の学会賞受賞が発表されたこともあり、受賞記念講演しながらの温かなムードの中でキーノートレクチャーが行われました。「体育学習における動機づけ研究の課題」と題し、動機づけ理論の概観から体育学の実践や体育学習研究の展望まで約1時間に渡りお話していただきました。

達成動機づけ理論や自己決定理論など、スポーツ心理学の研究者達にとって耳慣れた数々の動機づけ理論がこれまでに構築されてきたことを総括して紹介した後、これらの理論を体育学習に応用して実践する難しさを問題として提示されました。特に興味深かった指摘としては、「はたして教師による自律性支援的行動（選択や独自の取り組みの機会提供、有能さのフィードバック、統制的行動の回避など）はすべての児童や生徒の心理的欲求を充足させ、学習意欲を高めることに繋がるのか？」というものでした。さらに、個人単位（person-based approach）の動機づけの効果検討を行う必要性があるということも併せて提案されていました。身体運動を通して誰の、何を、どのように、どの程度まで伸ばすべきか、それがひとつの学校や競技団体の人員にとって同様であるとは限らないでしょう。しかしながら、一般的な学校教育では1人（2人以上の場合もありますが、いずれにしても少人数）の教育者に対し、数十人の生徒を相手に育成や教育を行うという構造があり、それゆえ個人に応じたアプローチは物理的にも時間的にも制限が伴います。この点はチームを対象にしてスポーツメンタルトレーニングを行う場合にも同様のことが指摘できます。一対多数の体制で支援を行う場合に、どこまで個に根差したプログラムを実施しサポートできるかどうかを検討することは、教育現場においてもスポーツ現場においても

永遠の課題であるように思えます。

スポーツと教育という要素は教育現場のみならず競技指導の場面でも関連するものであり、今回のキーノートレクチャーは指導者や教育者が持つ育成力の重要性を再認識する機会となりました。近年は国際大会でも日本人アスリートの活躍は目覚ましく、メディアの露出が増えたことで（ある程度脚色される部分もありますが）アスリートのみならず指導者の動向が人々の目に留まる機会もずいぶんと多くなりました。2020年東京五輪に向け、スポーツに関わる諸活動に注目が集まる時期が続くことと思います。スポーツを行う者を育てる力が今の日本には求められているのではないかと思うと同時に、その使命感が動機づけとなってスポーツ教育および研究がよりよい方向に進められていくことを期待します。

最後になりましたが、伊藤豊彦先生の学会賞受賞を心よりお祝い申し上げます。

司会報告

佐々木万丈（日本女子体育大学）

平成26年度のシンポジウムは、前年度に続きスポーツ競技に関わる「チーム力」がテーマであった。今年度は、これを実証的研究で取り上げる場合の視点や方法を検討することが課題であった。当日は、体育・スポーツ心理学の領域からお二人（河津慶太氏：九州大学、横山慶子氏：工学院大学）、一般的なグループ・ダイナミクス研究の領域からお一人（飛田 操氏：福島大学）の、あわせて3名のシンポジストにご報告いただき、さらに参加者との間で意見交換が行われた。

はじめに、河津氏は、チームパフォーマンスを予測する仮説モデルを紹介し、チームメンタルモデル、集団効力感および試合中の行動の相互作用プロセスが「チーム力」に該当するのではないかと提案された。そして、活動への積極的参加やコミュニケーションの深まりが戦術や課題の共通理解、集団効力感などの高まりにつながり、さらにチームパフォーマンスの向上に関係すると指摘された。また、研究では、集団の影響を受けた個人のデータは、集団内の類似性を適切に評価し分析する必要があると指摘された。

次に、横山氏は、力学系の視点に立ち、チームプレーの「上手さ」とパスの受け渡しの仕組みを報告された。「上手さ」とは他者への気づきによる先読みであり、複数の他者との距離関係を考え行動できるかが組織性の向上に関係すると指摘された。また、パスの受け渡しでは、ハブ（リーダー）となる選手が存在し、かつハブの時間による変化が重要であると述べられた。その他、メンバーの関係性はゲーム中に急激に変化すること、非線形なメンバーの関係性はチームの自律化を導きチーム力の変化をもたらすこと、部分（メンバー）と全体（チーム）の連動がチーム力に影響することなどが報告された。

最後に、飛田氏は、集団成員の個人的な課題解決能力や保有資源の大きさ、また集団が取り組む課題の性質や状況（解の自明性など）が集団によるパフ

ォーマンスに影響すること、さらに集団過程における異質性の顕在化と等質性の構築という方向性の異なる課題をいかにリーダーが解決できるかがチーム力向上に関係すると指摘された。また、等質性の構築では集団目標を再認識し共有すること、成員が集団目標の達成に向けて相互依存的であることを再確認すること、そのためには相互的なコンプリメント（肯定的評価）が重要であると指摘された。

以上のシンポジストからの報告後、フロアとの意見交換が行われ以下の見解が得られた。①チーム力の研究では、集団や課題の質の変化とパフォーマンス向上との間の媒介変数を明らかにし、時間軸を考慮に入れ検討する必要がある。②スポーツでは解の自明性が複眼的に捉えられなければならない。③潜在的なチーム力の発揮に関わる促進要因を明らかにする研究が今後の課題である。④チーム力発揮のプロセスを明らかにすることはチーム力のメカニズムを明らかにすることであるから、プロセスに迫る方法論を構築する必要がある。⑤その方法の一つとしてボトムアップ的な研究があげられる。

前年度、司会の土屋先生は、このシンポジウムが「チーム力」研究のキックオフになることを願うとまとめられた。今年度は、そのための視点や方法を具体的に探ることが課題となった。十分とは言えないまでも、いくつかの研究上の課題は共通に理解できたように思う。今後は、本専門領域の「チーム力」で、この研究が発展していくことを期待したい。



シンポジウム発表の様子

演者報告「チーム力の研究：その視点と方法を探る」

河津慶太（九州大学学術協力研究員）

1. はじめに

近年、体育心理学専門領域において注目を集めている「チーム力」。昨年度に引き続き今年度も「チーム力」をテーマとした、体育心理学専門領域シンポジウムが開かれた。シンポジストの依頼の電話を佐々木先生から頂いた時には、このような機会を与えていただいたことへの感謝、そしてそれを上回るプレッシャーで何とも言えない気持ちになったのを覚えている。しかしながら、プレッシャーをなんとかはねのけ（られたかどうかは定かではないが）、当日の発表を迎えることができた。

本発表では、筆者がこれまでに行ってきた研究の中での、「チーム力」の定義、3つの研究紹介及び今後の検討課題の紹介とその研究方法についての具体的な提案を行った。

2. チーム力の定義

筆者は、山口（2008）のチームワークの定義である、チームワークとは、チーム全体の目標達成に必要な協働作業を支え、促進するためにメンバー間で交わされる対人的相互作用であり、その行動の基盤となる心理的変数も含む概念」を援用し、「チームワーク」と「チーム力」を同義のものとして定義づけた。

3. 研究の紹介

チームワークには心理的側面と行動的側面が含まれている。筆者は行動的側面と心理的側面に注目しながらチームワークの下位概念を選定し、これらのチームワーク下位概念を含んだチームパフォーマンス予測の仮説モデルを設定し、モデルに含まれる概念間の関係や、それらの概念とチームパフォーマンスとの関係を分析した。筆者が設定した予測モデル内では、チームワークの心理的側面である、「チームメンタルモデル（Cannon-Bowers et al., 1990：チームの戦術やメンバーの特性などを、メンバーがどの程度共有しているかを表す）」と「集団効力感

（Bandura, 1998：チームの目標達成に対する、共有された有能感）」が、行動的側面である「試合中の行動（実際に試合中にメンバーが行う行動）」に影響を及ぼしチームパフォーマンスを発揮するという関係性が示されている。

2つの研究紹介の中では、筆者が行った研究の結果として、チームのミーティングに積極的に参加することや、メンバー同士が積極的なコミュニケーションをとることで、チームメンタルモデルが構築されていくことや、集団効力感への認知が強化されていくこと、チームメンタルモデル、集団効力感が試合中の行動に影響しチームパフォーマンス発揮につながっているという可能性、が示唆された。

4. 今後の研究課題、研究方法についての具体的な提案

筆者は、自身の研究の課題点として、チームワークの行動的側面の評価法の問題や、チームを対象とした研究データの階層性の問題を挙げた。それを踏まえた研究方法についての具体的な提案として、行動的側面の評価法としての観察法や、階層性のあるデータに対する分析法で、近年注目されてきている階層的データ分析を紹介した。

最後に、このような機会を与えてくださった佐々木先生、筆者とは違った視点から様々なご教示をしてくださった、飛田先生、横山先生、フロアーの皆様に心から感謝したい。

力学系としてみたスポーツの「チーム力」

横山慶子（工学院大学）

筆者はこれまで、連携や駆け引きといった集団の組織性を、プレイヤーの「動き」から検討しており、本シンポジウムの主たるテーマである「チーム力」そのものを研究対象としていない。しかしながら、「多数のヒトの社会的相互作用によって創出される集団的挙動」と捉えれば、プレー中における集団の動きと「チーム力」は、まるで異なる事象ではないと考え、恐れ多くも今回のシンポジウムの演者のお話を引き受けさせて頂いた。ここでは、当日に発表した内容の整理を通じて、改めて考察する機会としたい。

発表の論点は、力学系の視点から「チーム力」を考察することであった。力学系とは、「変化する現象」の時間発展の仕組みを記述する理論的な体系、あるいは「変化する現象」そのものを指す。スポーツにおける身体の動きは、まさに変化するため、動きの仕組みの理解を目的とした運動制御・学習領域では、力学系を用いた検討が活発に行われている（筆者もそのひとりである）。こうした力学系の視点は、「チーム力」などの定量化が難しい社会心理的な事象に関しても、応用可能と考えられる。特に「チーム力」は、「チーム力が向上（または低下）する」と表現するように、時間とともに変化し、その変化を良い方向へ導く方法を知ることが、「チーム力」研究の重要な目的のひとつといえる。そのため、「変化」の仕組みを紐解くことに主眼を置いた力学系の視点は、「チーム力」という複雑な事象を整理するための有効な方法といえるだろう。

では、力学系の視点から検討することで、何が明らかにできるだろうか。発表では、筆者らの研究結果を「チーム力」に関連づけて紹介した。詳細は省略するが筆者らは、集団の組織性を高めるためには、複数の他者の状態変化に「気づく」こと、コミュニケーションの核となるメンバーが状況に応じて入れ替わることの重要性を明らかにした。これらの結果

は、例えばメンバー間のチーム戦術の共有や、身体コンディションへの「気づき」、さらにはリーダーの交代などが、「チーム力」を良い方向へ発展させる要因であると関連づけられるかもしれない。発表では最後に、「チーム力」研究方法の一例について提案した。様々なチームスポーツで、大会期間中に「チーム力」の急激な高まりが生じる場合がある。こうした劇的な変化の直前に、チームやそれを取り巻く外部環境で何が起きていたかを検証する、という研究方法である。力学系では、複数の要素からなる集合体をひとつのシステムとみなし、外部入力がある場合のシステムを非自励系、入力がない場合を自励系と整理する。「チーム力」を非自励系としてみた場合、そこでの外部入力とは、対戦相手の状況や練習環境、あるいはメディア報道などが挙げられるであろう。こうした外部入力に応じた「チーム力」の変化の仕組みを、例えばチーム内のメンバー間の相互作用を中心とした検証で整理できるかもしれない。

以上のように、「チーム力」に関して力学系の視点から整理したが、実際に研究を進めなければ本質に迫ることが出来ない。今回のシンポジウムでのご縁をきっかけに、スポーツする集団を「チーム力」まで広げて検討できればと考えている。改めまして、このような機会を与えて下さった先生方と、共演させて頂いた先生方に感謝を申し上げます。

グループ・パフォーマンス研究から“チーム力”を考える

飛田 操 (福島大学)

集団によるパフォーマンスは、集団成員の個人的な課題関連能力や保有する資源の大きさによって大きく影響される。もちろん課題関連能力が高い成員からなる集団のほうが優れたパフォーマンスを示す。この意味で“チーム力”を向上させるためには、成員ひとりひとりの力量の向上が必須である。

また、集団によるパフォーマンスは、集団が取り組んでいる課題の性質や状況によって大きく影響される。課題の構造がクイズ問題のようなものであるならば、集団成員の中に、ひとりでも正解に達する成員が存在すれば、その集団は正解することができる。この種の課題構造の下では、集団によるパフォーマンスは、集団内の最も優秀な成員の課題関連能力に依存する。

一方、解の自明性が低い課題においては、集団によるパフォーマンスは、集団成員全員の課題関連能力の配置によって左右される。このため、この種の課題において“チーム力”を高めるためには、集団成員全員の能力や資源を底上げする必要がある。

さらに、集団によるパフォーマンスは、集団過程によって大きく影響される。

集団が優れたパフォーマンスを挙げるためには、成員が保有する課題関連能力の違いに応じて集団を体制化していく必要があり、この過程で、地位や役割が分化していく。この過程にともない、成員相互の異質性が顕在化する。

一方で、相互の異質性の顕在化により、成員相互のコミュニケーションや合意形成が困難となり、情緒的な葛藤や対立が生起することで、集団凝集性が低下する可能性が高まる。このような状況では、“チーム力”も低減すると考えられる。

異質性の顕在化により、種々の問題が生じかねないのであるから、“チーム力”向上のためには、異質性が顕在化する集団過程において、等質性を構築するためのリーダーシップの試みが重要な影響を与

える。集団のリーダーは、異質性の顕在化と等質性の構築という方向性の異なるふたつの課題を、同時に達成しなければならない。このジレンマの解決が、“チーム力”の向上のための、大きなポイントになるのではないかと。

すると、「等質性を構築するための試みとは何か」、「どうすれば等質性は構築できるのか」が問題となる。最も重要なのは、集団目標を再確認して共有する働きであろう。集団目標を共有することにより、成員の間に等質性を構築することが可能となるのである。第二に、相互の異質性は、この集団目標の達成のために必要不可欠であり、成員それぞれが集団目標の達成に貢献していることを成員全体で再確認すること（相互依存性の再確認）であろう。成員が、その違いを相互に尊重しあい、相互の貢献度を高く評価できる関係が“チーム力”の向上に結びつくのではないだろうか。

特に、集団成員に大きな影響を与えるのが、リーダーや他の成員からのコンプリメントである。また、リーダーや集団成員のコミュニケーションの方向性もチーム力に影響を与える。「問題」について焦点をあてるプロブレム・トークでは、問題は解決しなればかりか、対立が深まり、かえって問題が深刻になったり、新しい問題が発生してしまうことが多くある。リーダーや集団成員に求められるのは、「解決」について焦点をあてるソリューション・トークなのである。

傍聴記「チーム力の研究：その視点と方法を探る」を拝聴して

小笠希将（鹿屋体育大学大学院）

本大会のシンポジウムは前回大会に引き続きテーマが「チーム力」であった。それぞれの先生方が異なった視点から「チーム力」について考察されており、長年チームスポーツを行ってきた私としては大変興味深く拝聴させていただいた。

初めの河津慶太先生はチームパフォーマンス予測モデルの中の「チーム力」の位置づけから、チーム力向上に必要な要因を明らかにしていた。具体的には、戦術や選手の特徴の共通理解（チームメンタルモデル）とチームの自信（集団効力感）が試合中の行動を変え、パフォーマンスに影響を及ぼすということであった。スポーツ場面では共通理解を深めるためにコミュニケーションをとることの重要性は常に言われてきたという経験があるため、河津先生の研究結果はとても共感できるものであった。

次に力学系の考えであるダイナミクスの観点からチーム力を向上させる方法について横山慶子先生が発表された。ダイナミクスとは「生きている」現象の時間的発展の仕組みを捉えるもので、横山先生はスポーツにおけるプレイヤーの時空間的な動きを解析することで変化の仕組みの理解を試みていた。結果としては他者への気づきを高めるための相互作用やコミュニケーションの核となるメンバーが状況に応じて入れ替わっていくことの重要性を述べており、改めてプレイヤーの相互関係を深めることの重要性を感じる内容であった。

最後にご登壇なされた飛田操先生は先に発表なされたお二人の先生が共通して示していた「相互理解」や「コミュニケーション」がなぜ重要なのか、また具体的にはどのように「相互理解」や「コミュニケーション」を図るのが良いのかを説明するような発表であり、「チーム力」に関する理解をさらに深める内容であった。飛田先生は集団でのパフォーマンスを決定するのは①個人の課題関連能力 ②課題の性質や状況 ③集団過程であり、この中で生ま

れる異質性の顕在化とそれをまとめる等質性を構築することがチーム力向上の大きなポイントになることを指摘していた。そのための方法としては集団の目標を共有し、お互いの異質性を理解することが必要になるということであった。またチーム力向上に必要なコミュニケーションとして、肯定的評価（コンプリメント）や問題志向ではなく解決志向的なほうが良い事を示していた。発表全体の流れが理解しやすく引き込まれる内容であったことも印象的であったが、チームスポーツでは当たり前のように行われているポジションなどの役割の振り分けや、1軍、2軍といった事が実は集団を崩壊させる危険性をはらんでいるという指摘は特に印象的であった。このような普段はあまり疑問を持たないようなところにフォーカスし、その問題点と解決方法を提示していくということはまさに「チーム力」の向上につながるのではないかと感じた。

今回のシンポジウムを通して、今まで経験からとらえていたぼんやりとした「チーム力」というものが、具体的なものになったように感じた。そして様々な視点から考えられた「チーム力」というものを自分自身の視点から改めて考えてみる良い機会となった。

座長報告

東山明子（畿央大学）

大会3日目8月27日（水）10時から始まった一般発表の最初のセッション3演題を担当させていただきました。会場は宮沢賢治の作品に因んだ名前の銀河ホール。ほどよい広さと構造で、学会発表にふさわしい雰囲気がありました。各演題ごとに発表時間15分とそれに続く5分の質疑応答時間という設定でした。

最初の演題は、陳昱龍先生（大阪体育大学大学院）の「中国と日本の大学生におけるライフスキルとスポーツ参加動機の関連」でした。日常生活スキル測定尺度を用いて、ライフスキル低下が懸念されている中国の大学生のスポーツ参加動機とライフスキルの関連を、日本の大学生の結果との比較から文化比較を行うものでした。スポーツ参加動機に国の違いがみられたものの、スポーツ参加動機とライフスキル得点に正の相関が示されたことから、中国においてもスポーツ参加がライフスキルの向上につながる可能性が示唆されたことが報告されました。統計結果解釈についてや、対象者の偏りについての質疑応答がなされました。

2題目は、松下周平先生（大阪体育大学大学院）の「試合出場および不出場に対する原因帰属と動機付け、組織風土の関係について」でした。学生アスリートの試合出場を成功事態、不出場を失敗事態として動機づけに及ぼす影響を検討し、成功の理由を努力と帰属すると内発的動機づけが高まること、また練習方法やコーチの指導方法が良かったことに帰属すると、内発的動機づけが高まり、非動機づけが抑制されるとの研究のまとめでした。動機付けの状態から認知が高まったから原因帰属が高まったとの方向も考えられるのではとの指摘や、チーム優先風土と原因帰属の関係など活発な質疑応答が行われました。

3題目は、東浦つかさ先生（大阪体育大学大学院）の「くやしさの持続と動機づけの関連性 大学

アスリートを対象とした縦断的調査」でした。インカレで負けたくやしさと普段の練習でのくやしさについて1年間7つのイベント毎にリアルタイムで調査し、変化はあるがどちらも持続すること、くやしさと競技意欲には共変関係がみられたことからくやしさの感情的動機づけ機能の反映の可能性を示唆する報告でした。ネガティブな感情をどのようにポジティブなエネルギーに変換するのか、スポーツ場面への活用に期待したいと感じました。

本セッションにて発表されたのは、いずれも博士課程や修士課程で研鑽を積んでいる若手研究者の先生方でした。それぞれ研究背景から目的への過程が明確であり、方法も吟味されており、発表の仕方も整っていました。共通のキーワード「動機づけ」を中心に様々な角度からアプローチしようとするもので、発表を研究のひとつの区切りとしての途中経過報告と位置づけ、さらに発展させようとする真摯な姿勢と意欲を大いに感じるものでした。フロアの先生方からの貴重な示唆に富むご発言をもとに、若い発表者同士が意見交換する時間があるとさらにセッションの意義が高まったのでは、と反省しています。3人の発表者の方々、ご発言いただいたフロアの先生方、そして朝一番のセッションであるにもかかわらず参加いただいた多数の先生方みなさまに感謝いたします。また、今回の学会は大会本部ではなく各専門領域から会場スタッフを出すことになったのですが、受付や計時係りや会場マイク係りなどを体育心理学を熟知する大会参加者の大学院生さんたちが担当してくれていて、かえって安心感もありました。ありがとうございました。

座長報告

山本裕二（名古屋大学）

「心理的プレッシャー下における中枢及び末梢の運動制御機能—下肢による反応課題時の皮質脊髄経路の興奮性と筋活動の増大」 田中美吏（福井大学） 霜辰徳（福井大学）

プレッシャー下の運動制御メカニズムの解明を目指し、座位で踵を上げるGo-NoGO反応時間課題を用いた検討が報告された。そして、経頭蓋磁気刺激法（TMS）によって高次中枢の働きを、Hoffmann反射によって低次の脊髄反射の影響を検討していた。また、プレッシャー条件は報酬によって操作されていた。結果としては、踵上げ動作の拮抗筋である前脛骨筋にのみ、高次脳機能の指標である運動誘発電位（MEP）がプレッシャー下で増大したことから、上肢と同様高次脳機能への影響が示唆された。フロアーから、なぜ拮抗筋である前脛骨筋にのみ、プレッシャーによる影響が出るのか、あるいはどのようにこの結果を解釈するのかといった質問が出された。「投擲競技における運動伝染の原因と対処法に関して」 竹内竜也（鹿屋体育大学大学院） 中本浩揮（鹿屋体育大学） 幾留沙智（鹿屋体育大学） 森 司朗（鹿屋体育大学）

投擲競技における他者の失敗が伝染する現象を取り上げ、共通符号化仮説、あるいはミラーニューロンシステム仮説に基づき、その機序と対処法を検討した。投擲結果の予測が容易な動作を見た後の投擲では、予測が困難な動作を見た後よりも、投擲軌道が左にずれることが明らかになり、「見る」ことが「行う」ことに影響を及ぼしていると言えた。そこで、他者の動きを見る際に、焦点づけを自己に向けるか、他者に向けるかを比較したところ、自己に焦点づけした方が、他者に焦点づけするよりも運動伝染の影響を抑制することを報告した。フロアーからは、自己への焦点づけの方法・教示に関する質問や、自己への焦点づけの意味についての質問が出された。「一致タイミング標的の接近速度に応じた視線動作

と反応動作のパタン分類」 津田龍一（山梨大学大学院） 木島章文（山梨大学） 中本浩揮（鹿屋体育大学） 山本裕二（名古屋大学）

一致タイミング動作が可能な標的速度を探るとともに、その際の視線動作を検討することを目的とし、全長4mを2m/sから14m/sで接近するLED標的に対する頭部の回転と眼球の回転を、ボタン押しによる一致タイミング誤差とともに計測した。その結果、最も速い標的速度に対しても一致タイミング動作は可能であったが、標的速度の増大につれ頭部の回転は減少し、眼球の回転は、反応後に生じていることが報告された。このことは、「目で追う」前に「手で追う」ことを示しており、結果的には尚早反応であるにもかかわらず、内省としては遅延したと感ずることとの関連性が示唆された。フロアーからは、実験参加者の運動経験と視覚追従ストラテジーとの関連の質問や、単純反応時間の計測の必要性などが指摘された。

いずれの発表も、スポーツ場面で観察される現象に基づき、実験的に解明を試みたもので、実験条件等も工夫されており、興味深い内容であった。ただ、機序を解明するためには、モデルによるシミュレーションなど、構成論的アプローチを組み合わせることによって、さらに理解が深まるのではないかと、自らの研究も含め感じるところであった。

座長報告

豊田則成（びわこ成蹊スポーツ大学）

東関東大震災の爪痕が未だ癒えぬ盛岡の地であって、どうしても心を奪われてしまったのは、会期と時を同じくして土砂災害で被災をされた広島の方々への悲哀でした。突然の惨事で悲しくも世界された方々の中には、若い命や小さな命もあったようです。テレビでは、未だ行方分からない身内を必死になって捜索されるご家族の苦しみが伝えられてきました。誠に、胸が痛む思いです。ここで、ご逝去された方々に対して、哀悼の意を表したいと思います。どうか、安楽かにおやすみください。

そのような中、岩手大学で開催された日本体育学会第65回大会において、私は、口頭発表3の座長を務めさせていただきました。演題は3題あり、それぞれがとても刺激的な研究発表でありました。

まず、はじめに、大阪体育大学大学院の熊谷史佳氏のご発表は、「異なる色彩環境がストレス課題時の心理・生理に及ぼす影響 大学生アスリートを対象として」でした。ご発表では、色彩の様々な影響に着目され、実験を遂行されていました。特に、ストレス課題の設定は、とても独創的であり、大変興味深く感じました。フロアからは、設定条件の精度をあげて、次のステップに進むようにといったご示唆もいただきました。今後の展望として、様々な条件設定での展開が期待できます。今のお取り組みを大切にいただき、発展的な研究に取り組んでいただきたいと思いました。

次に、奈良女子大学大学院の筒井香氏のご発表は、「スポーツ競技場面で生じる力みの要因 認知的側面からの検討」でした。ご発表では、これまで「あがり」といった観点で進められてきた研究課題に、新たな角度からのアプローチの可能性を感じずにはいられませんでした。「力み」や「空回り」といった概念は、スポーツフィールドで頻繁に生起している問題であり、それに対して、選手側の視点から分析を進められていたことは、斬新で、とても共感で

きる内容でした。これからも、こういった「視点の移動」を伴った議論が展開されることに期待をしたいと思います。

そして、大阪体育大学大学院の中原結香氏のご発表は、「スポーツにおける『フロー体験』と心理的競技能力との関係」でした。チクセント・ミハイによって提唱された「フロー」の追究は、スポーツ心理学研究における永遠のテーマのように思えてなりません。とても魅力的な事象であり、説得力のある概念であることに相違ありません。ご発表の中では、その「フロー」を生み出すための可能性について議論されました。具体的には、心理的競技能力との関係を検討されたことで、スポーツフィールドに対して、具体的で、有益なフィードバックが期待できると推察できました。

最後になりましたが、座長が全くの非力故、それぞれのご発表に対して、活発な議論が展開されるまでには至らなかったことに対し、心からお詫びを申し上げます。しかしながら、ご発表された3名の若い研究者が、今後、どのようなお取り組みを展開されていくのかについては、大きな期待を抱かずにはいられません。今後のご発展を祈念しております。

座長報告

中本浩揮（鹿屋体育大学）

大会3日目の8月27日に、運動学習・制御に関する3演題の口頭発表が行われた。

1つ目は、細野裕希先生（立命館大学）による「サッカーのドリブルに関係する能力についての検討」であった。上位レベルのサッカー選手はドリブル能力が高く、スプリント力と関係があることは既知であるが、ご発表ではコーディネーション能力との関係が報告された。結論として、ランダムに配置されたラインを踏まずに素早くステップを行う課題で測定されたリズム化能力のみに、ドリブル能力と相関があることが報告された。発表後は、ステップのリズムを切り替えるトレーニング（ラグートレーニングで速度やステップを途中で切り替える）の有効性など応用的視点に立った議論や報告された相関に知覚方略や運動準備といった課題間の共通項の存在が影響しているのではないかという機序に関する議論が行われた。相関の背景にある共通項の解明が進めば、新たなトレーニング開発につながる内容と感じた。

2つ目は、宮田紘平先生（東京大学大学院）による「発声によってリズム運動の時間的安定性は高められる」であった。リズム運動中の外部聴覚刺激の付加は引き込み現象を生じさせ、運動の時間的安定性を高めることが同研究グループで既に報告されているが、今回は、自ら発生する音がリズム運動の時間的安定性を高めるかについての検討であった。結論として、リズムカルな発声と膝屈曲運動との間に引き込みが生じること、発声との協調によってリズム運動の時間的安定性が増すことが報告された。また、この現象は聴覚フィードバック無しでも保たれることから、内部生成された情報の統合が安定性に影響している可能性が示された。フロアからは、伸展局面と屈曲局面での発声と運動の協調の違いが、呼吸や力量調整の違いに起因しているのではないかといった質問やリハビリへの応用の可能性についての質問が行われた。

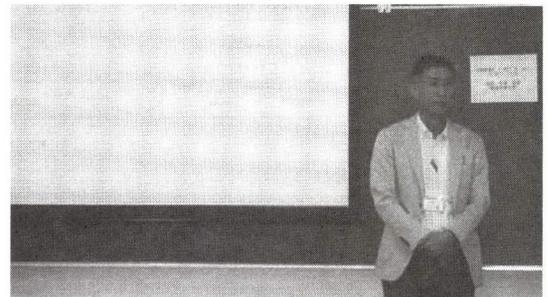
最後は、山本裕二先生（名古屋大学）による「サッカーゲームにおけるボールと選手の動態」であった。山本先生の研究グループは、力学系の理論に基づいて、一見複雑なスポーツ現象に、自然界の普遍則が潜んでいることを証明し続けている。今回は、ボール位置とチーム前線位置の時間変化に、自己相

似性が現れるという成果に続き、なぜそのような自己相似が生じるかについてのご報告であった。結論として、ボールを中心とした選手の相対的な移動ベクトルの平均を時系列に分析すると、全体がまとまる状態と分断する状態が存在し、これらの切り替えがボールの状態（キープかパスか）によって生じることから、この時空間的な入れ子構造が自己相似を生じさせていると報告された。サッカーのゲームのような不良設定問題の中に潜む普遍則を探すのに手取り早い方法は、制約を加えて良設定問題とすることだが、山本先生はそれをせず、実際場面をまるごと扱う所に凄さを感じた。また、人間の意思はどのように作用するのかという質問に対し、意思や個人のスキルはゲーム展開に影響するが、それを越えた普遍則が我々の運動に潜んでいると答えられ、納得させられた。

以上のように、非常に高度な実験系でありながら、応用性を感じられる発表ばかりであり、取りまとめどころか、フロアとの活発な議論に素直にうなずくだけの座長になってしまった。多くの先生方の建設的なご発言と発表された先生の素晴らしい研究に感謝したい。



座長：中本浩揮先生（鹿屋体育大学）



演者：山本裕二先生（名古屋大学）

座長報告

佐々木万丈（日本女子体育大学）

大会三日目、8月27日の午後、いずれも大学院において修士、博士それぞれの学位にチャレンジされている若手研究者4名の発表の司会を担当した。

最初は、大阪体育大学大学院の山越章平氏による「大学生アスリートにおける反すう及び省察と心理的競技能力」であった。臨床心理学で指摘される反すうと省察の心理的要因との関係を、心理的競技能力との関連から検討した研究であった。アスリート86名の調査データを相関分析した結果、反すうが複数の心理的競技能力の要素に負の相関を示したのに対し、省察には有意な相関関係が認められなかった。このことから、大学生アスリートへの介入では反すうに着目することが重要であると指摘された。反すうと省察は、いずれも認知的操作と考えられるが、本研究の起点が臨床につながっていることからすれば、省察に相関がみられなかったことの意味についても考察を深める必要があると思われた。

二人目は、同じく大阪体育大学大学院の柄木田健太氏の「高校野球の守備時におけるあがりに関する研究」であった。高校野球選手134名を対象に、あがり、性格特性および守備時の自信を測定する尺度が実施され、相互の関連性が検討された。分析結果から、あがりと性格特性や自信の間には多くの関連がみられること、守備位置によってあがりの自覚に差がみられることなどが指摘された。フロアからは、選手へのフィードバックの仕方、あがりが生じる状況の多様さを考慮した考察、性格以外の関連要因に着目した考察の必要性などが指摘された。緊張場面に対する認知的評価の個人差などへの考慮も必要と思われた。

三人目の発表は、広島大学大学院の来間千晶氏による「『気持ちが切れた』競技者に関する質的研究」であった。競技者によって「気持ちが切れた」と表現される心理的問題を、半構造化面接による記述データとKJ法によって検討し、どのような心理

的構成概念が「気持ちが切れた」状態を説明しているかが考察されていた。フロアからは、記述データを収集した調査対象者が、本当に「気持ちが切れた」という共通の経験を有する調査対象者と言えるのか、得られた知見の妥当性を確保する上でKJ法が適当な研究方法と言えるのかなどの意見がだされた。また、収集された記述データの解釈・考察に対する質的研究者のトレーニングの重要性なども指摘された。

最後の発表は、びわこ成蹊スポーツ大学大学院の伊藤麻由美氏の「メンタルマネジメントにおける関係性への質的アプローチ」であった。選手に対するメンタルマネジメント（MM）場面では、選手、監督およびMM指導者との間にどのような関係が生まれるのか、また三者の適正な関係に係る要因は何か、M-GTAを用いて分析された。質疑応答では、三者の関係性を検討するために、なぜMM場面が取り上げられたのかなどの質問が出された。また、本研究では、MM実施者が本研究者であったことから、客観的知見を求めようとするときに、研究者自身が強く関わる場面が分析対象となることに問題はないのかが指摘された。研究デザインの慎重な設定の必要性が考えられた。

前半の2題は量的な研究であり、後半の2題は質的な研究であった。フロアから出された質問や意見の全体を俯瞰すると、やはり、研究対象あるいは関連する変数の定義の重要性が考えられた。4名の若き研究者の今後の活躍を祈ると共に、ご協力を頂いたフロアの皆様に感謝を申し上げたい。

座長報告

土屋裕睦（大阪体育大学）

以下の4演題の座長を担当させていただいたので概要を報告する。

最初の演者は西洋子先生で、演題は「共創表現を育むファシリテータのはたらき」であった。西先生は身体表現論、舞踊学がご専門で、精神科病棟でのダンスセラピーのご実践もある専門家である。今回の研究では、東日本大震災の被災地での共創的な身体表現活動を対象に、活動者の位置を計測し、表現の場の生成につながる相互の関係性に対してファシリテータがどのようにはたらきかけているのかを検討した。その結果、段階に応じてここに安定した手合せから、次に空間を「切る」ような軌跡が認められ、それに呼応して小集団が崩れ、全体に大きな動きが生まれる、すなわち共創の場が生まれることが確認された。フロアーからは、テーマや音楽の設定の影響や、ファシリテータの意図や相互作用などについて質問があり、興味深い議論がなされた。

2演題目は、三輪敬之先生による、「共創表現における場の創出について」であった。三輪先生は、早稲田大学理工学術院教授でロボット学にも詳しい工学博士である。本研究では、自身の無意識的な働きがあたかも相手の動きとして表現されるような一人二役の手合わせ表現システムを構想し、その設計と開発を通して、自己のなかの両者の関係性をシステム論的に検討することであった。その結果、意識的な私と無意識的な私との間における手合わせ表現の共創は、能動・受動のような二項対立的な関係性からではなく、それらがズレながらも一つであるような中動的な関係性から生まれることが認められた。これは私が〈私〉に出会うことによって、共創表現が可能になることを示唆しているように思われると報告された。「この知見がどのような動作の獲得につながるのか」との質問に対して、「『ため』が必要になる競技に応用可能である」といった見解が示され、フロアーの関心を集めた。

3演題目は、菊池章人先生による、「東日本大震災被災地小学校への『2分間朝のスクワット体操』支援について」であった。被災地小学校児童99名を対象に、教室内で立ち上がり動作を音楽に合わせて、

大きな声で数えながら2分間30回行った。児童の気分状態を2次元気分尺度（TDMS）で測定したところ、この体操を行った場合、同じ時間帯に特に何もしない場合よりも、気分の活性度（元気さ）や快適度（気分の良さ）が有意に向上したことを認めた。さらに、この体操は教諭、児童から好感され長期継続しているとのことであった。震災の影響で運動環境が劣化した被災地の小学生にとって、運動を音楽や発声と組み合わせる工夫により、教室内でも2分という短時間で活性快適な気分状態へ向上させることが示唆された。

最後の発表は、津田忠雄先生の「禁煙支援活動と樹木画」であった。津田先生は近畿大学教授、体育学者でありながらいち早く臨床心理学的アプローチを取り入れた、我が国のスポーツカウンセリングにおける先駆者の一人である。本研究は、禁煙を希望する大学生9名に対して、禁煙支援活動を3ヶ月間実施し、その心理的プロセスについて樹木画を用いて検討した。その際、単なる調査ではなく、描画および面談を心理的支援活動と明確に位置づけ、目の前に描かれつつある樹木の〈成長〉や〈変容〉の可能性に注意を払い、支援をしたとのことである。喫煙者9名の中6名が禁煙に成功し、禁煙活動中は、情緒的な戸惑い、受け入れ、混乱、当惑、自信等、それぞれに自己物語が生成されたと結論づけられた。樹木画の持つ、アートセラピーの要素に着目した実践であり、体育系大学生やアスリート達の喫煙問題を何とかしたいなあと思い悩んできた筆者には大変興味深い内容であった。それゆえ、禁煙成功率が100%でないことに個人的な不満を述べると、共同研究者の東山先生からは「良いほうですよ！」とのご回答を得た。改めて、禁煙したいと希望しながらなかなか卒煙できないタバコの問題の深刻さを痛感した。

演者報告

小岩 瑤（日本大学大学院）

8月25日～28日にかけて、岩手大学にて日本体育学会代65回大会が開催されました。会場の岩手大学は広大な敷地を有していて、多くの方がお見えになっていました。

私は日本体育学会3日目の午後に、「バスケットボールのフリースローにおけるシュート前のパフォーマンスルーティンの影響について」という題で、ポスター発表をさせていただきました。体育学会初参加ということもあり発表直前はとても緊張していました。今回発表させていただいた研究は、バスケットボールのフリースローにおけるシュート前のドリブルの有無が、シュート前の注視行動とシュートの成功率に与える影響について検討することを目的として行ったものでした。発表当日は、多くの方がポスターを見に来てくださりました。同領域の研究をしている方からアドバイスをいただき、多くの先生方からご指摘、ご意見をいただくことで研究のレビュー不足や実験方法について見直すきっかけになりました。お話中メモを取りきれないほどのお話をたくさんいただき、とても貴重な体験をさせていただきましたことができました。

今回の発表を通じて、多くの先生方と様々な視点からディスカッションさせていただくことができ、今後の研究の方向性を確認することができました。貴重なご意見やご指摘をいただきました先生方に、この場をお借りして心より感謝申し上げます。

体育学会に参加したことで、普段の研究生活では考えられないほどの意見を多くの方々にいただき、自分と同じ研究領域、他領域の先生方とお話することで研究のおもしろさを再認識しました。また、自分の同じ研究領域に加え、他領域の知識が多く得られることも体育学会の魅力だと感じました。

このような発表の場において自分の研究に興味を持っていただける方が多くいて、とても嬉しい気持ちになりました。

また、他の方の発表を拝見させていただき、内容の伝え方、ポスターの色使いや文字の大きさなどの工夫で研究内容がわかりやすいものが多く、今後の学会発表の参考にしたいものがありました。

今大会で得た知識に加え、もっと多くのことを学び日々精進していきたい所です。

今後も研究発表を定期的に行い、先生方の客観的な意見をいただき、自分の研究のより良い発展を目指していきたいと思えます。

最後になりますが、今回が大会初参加である新参者の私に演者報告の執筆という任を与えてくださった体育心理学専門領域の皆様にはこの場をお借りして感謝申し上げます。



ポスター発表の様子

演者報告

沖 和砂（順天堂大学大学院）

この度、岩手大学ほかにて開催された日本体育学会第65回大会体育心理学分野でのポスター発表について、報告を執筆する運びとなり大変恐縮しております。私は学会員となってから、ほぼ毎年ポスター発表をさせて頂いております。このような機会をもって特別に表現するわけではありませんが、私にとって今回の発表が最も実り多きものになったように感じます。その理由として、本大会のテーマである『体育・スポーツのイーハトーヴを求めて いつまでも わをひろげ てをつなぐ』ことを果たせたからです。その要因はいくつかあります。

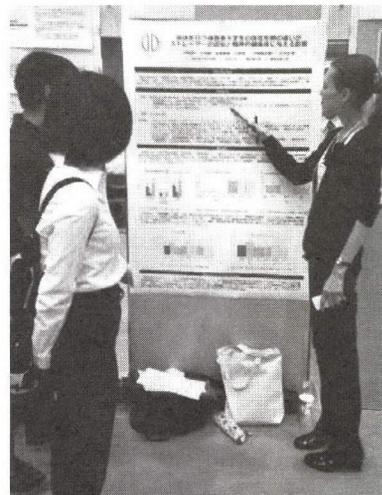
今回、私は「競技を行う体育系大学生の居住形態の違いがストレスの認知と精神的健康度に与える影響」というタイトルで発表しました。内容を要約致しますと、居住形態として、“学校の寮”、“部活の寮”、“一人暮らし”を設定し、居住形態の異なる体育系大学生間のストレスの認知と精神的健康度の値を比較しました。その結果、“部活の寮”で生活をしている学生のストレスの認知度は高く、さらには、精神的健康度も低いことがわかりました。本研究に関して、90分という限られた時間、また最終日であるにも関わらず多くの先生方や学生の皆さんからご意見を頂くことができました。身近に感じるタイトルであったからでしょうか、特に学生さんが自身の経験や最新の情報を率直に話して下さいました。身近に起きている問題をテーマにし、皆さんに認知してもらうことは、まさに研究の『わをひろげ』ることができたと言えます。

そして、そこで得られたヒントや課題をもとに、今後は研究を発展させなくてはなりません。本研究の課題は、①対象者の属性（居住形態）に関する比率を揃えること、②別の居住形態（実家暮らしなど）も設定すること、③対象者の競技レベルや部活ごとに結果を示すことなどが挙げられます。ご意見を下さった方々を中心に、共同で研究を進めていく仲間ができました。これは、まさに研究の『てをつなぐ』ことができたと言えます。今回、この仲間には、他分野から募って下さった方がおります。体育心理学が専門分野ではないものの、ポスター発表が

他分野と一堂に行われたことによって、このような機会を得ることが出来ました。

私は、研究というものは一人ではできないと考えており、共同研究者や協力者、指導者があってこそ成り立つと思います。本大会のテーマである『いつまでも わをひろげ てをつなぐ』ことは、研究を行う上で大変重要なことですが、なかなか実行できないことでもあります。そのような機会をこの岩手という地で得られたということは、偶然ではなく必然であったようにも感じております。『ワレハイツシヨニ コレカラ 何ヲ論ズルカ』は、『私達は、一緒に、これからこの問題にどのように取り組むことができるか、それをどのように世に発信し貢献していくかを話し合う』こと意味しているように思います。これからの研究は、問題となる事柄の解決や改善のみならず、良好な結果をもたらす取り組みや要因つまりポジティブエフェクトの発信も同時に行う必要があると考えます。自身の為だけではなく、その研究が他者や他物の為にもなるよう、その心構えをもって今後も研究活動に励んでいきたいと思っております。

最後に、本大会の関係者の皆様へこの場をお借り致しまして心から感謝申し上げます。ありがとうございました。



演者：沖 和砂先生（順天堂大学大学院）

大会参加記

西田順一（群馬大学）

平成26年8月下旬に岩手大学などで開催された日本体育学会第65回大会に参加できた。私は、九大の修士課程時の第49回大会（愛媛大学）から今回まで欠かさずに学会大会に参加を続けており、今年も参加することができたという達成感と安堵感を得ることができた。ふり返るとこれまで日本体育学会の参加のために学会参加費や交通費などの多くの費用を払い、また移動時間や準備時間などに多くの時間を費やしている。私自身、数ある学会の中でも日本体育学会を最重要な学会と捉えていることもあり、これまで参加と発表を15回以上にわたり続けることができたと考えている。日本体育学会は、体育人として、体育を様々な視点から最もじっくりと考えられる重要な場であり、また体育を熱心に考えている全国の研究者と語りあえる貴重な場であると常々考えてきた。今後も本学会でいろいろな考えや知識を吸収し、また様々な研究者と出会い語らい、さらに日本各地の風土を体感・理解するといった学びを続け、自身の成長の糧としていきたい。本学会の合間には大震災の被災地である釜石にも足を運ぶことができ、まだなお残る震災の爪痕や復興の様子の一部を窺うことができた。また釜石の市場にて海鮮（生ウニは美味！）を存分に味わうことができた。

さて、本大会でも、いろいろな興味深い企画が準備され、これまでと同様に他の専門領域におけるシンポジウムや研究発表も拝聴でき、貴重な知識を得ることができた。中でもとりわけ、体育心理学領域の伊藤豊彦先生のキーノートレクチャー「体育学習における動機づけ研究の課題」は私にとっても非常に大きな学びの場となった。

まず本キーノートの会場は200人くらい？の聴衆でぎっしりと埋まっており、他領域の研究者の姿もあちこちに見られ、先生の研究への関心の高さを象徴していた。丁度、本年度の学会賞に見事に選出されタイミングの良い、旬の発表であったことも動員

につながっていると思われた。通常、島根大では小人数の学生に講義されていらっしゃるようで、最初は緊張しておられる様子にも見受けられたが、途中からはいつもの伊藤先生らしい語りかけるような方言を交えた口調で進められ、会場は和やかな雰囲気終始した。キーノートの内容は、学習領域を中心とした動機づけ理論を分かり易く解説され、続いて伊藤先生がこれまで学校体育授業を対象になされてきた研究の個人史を紹介されていた。いずれの研究もそのときその時の先生の強い問題意識を反映していると実感でき、やはり研究は強い思いを込めて取り組むものだということを改めて感じた。また、レクチャーの最中に先生は「理論で網（あみ）をかけると、そこから抜け落ちているものがたくさんある」とおっしゃられ、強く印象に残った。心理学研究では何らかの理論を中心に据えて事象を捉えようとすることが多いが、体育や教育の現場では、その理論では完全にあてはめきれないことが実際にあることは私も強く感じていた。おそらく、伊藤先生は何らかの理論に則りつつも、それだけではないだろうという天邪鬼的な思いで研究に取り組まれていたからこそ、この発言に至ったのではないだろうか。先生の研究への思いや姿勢を含めて、キーノートでは多くの学びを得た。

今回の体育学会でのいろいろな学びも今後の自身の研究や教育に活かしていきたいと感じながら、盛岡をあとにした。

Ⅱ. 研究会の活動報告

スポーツ社会心理学研究会 活動報告

杉山佳生（九州大学）

研究会の更なる充実と幾分の若返りを目指し、平成25年度末から26年度にかけて、集中的に、メンバーの募集をしました。その結果、メーリングリスト登録メンバー数は倍増し、平成26年8月時点で、77名の登録となりました。その登録メンバーの期待に応えるべく、平成26年度は、久方ぶりに、「ちゃんとした」例会の開催に至りました。

日時は、平成26年6月28日（土）14時～19時30分、場所は、第一部が九州大学筑紫キャンパス（福岡県春日市）、第二部がJR博多シティ（博多駅ビル）でした。事前に参加の申込みを募り、25名（共同会長の阿江美恵子先生、伊藤豊彦先生を含む）の参加を得ました。

内容は、初めて本研究会に参加された方が多かったため、まず、事務局から、研究会の概要を紹介し、引き続いて、参加者に、自己紹介をしていただきました。当初の予定では、簡単な自己紹介ということで、20分程度の時間を考えていたのですが、実際には、自己紹介ごとに、関係者にも一言コメントを求めるといようなアドリブを入れたりしたため、1時間以上を要し、その後の予定を大幅に変更することになりました。とはいえ、多彩なメンバーの研究等について幅広く知るために、あるいは、メンバー間の良好な社会関係を構築するために、大変有益な時間であったと考えています。

自己紹介の後には、事前にお申出をいただいていた6名の先生方から、それぞれが行っている研究あるいは活動内容等について、ご報告いただきました。ご担当いただいたのは、辻田佳保里先生（大阪体育大学大学院生）、関岡有季先生（同）、谷本英彰先生（当時は東亜大学、現在は大阪産業大学）、島本好平先生（兵庫教育大学）、西田保先生（当時は名古屋大学、現在は愛知学院大学）、土屋裕睦先生（大阪体育大学）でした（報告順）。「お一人15分以内で、開始から12分を超えると質問は受け付けません」

というタイトな時間設定でご発表いただいたため、質疑応答も中途半端なところで終了せざるを得なくなり、発表者の先生方にはご迷惑をおかけしたかもしれません。それでも、私個人としては、様々な立場からのご意見やお考えを伺うことができ、スポーツ社会心理学研究の今後の新たな展開に、思いを馳せることができました。

第一部では、この後、「スポーツ社会心理学研究パラダイムの再構築」というテーマでのフォーラム（参加者全員での意見交換）を予定していたのですが、残念ながら、割愛ということになりました。まあ、このような少しルーズな感じのあるところが、スポーツ社会心理学研究会の特徴でもありますので、お許しただけているかとは思っています。

第二部は、JR博多シティというところに場所を移して、「フリースタイルディスカッション」を行い、文字どおり、自由に意見交換をしてもらいました。この第二部も含めて、「久しぶり」の例会は、とりあえず成功裡に終わったのではないかと考えています。この例会を、できれば毎年開催し、体育・スポーツの社会心理学的研究の発展に資するものとするのが、これからの課題です。皆様のご協力を、よろしくお願ひしたいと存じます。また、ここ数年の懸案事項であるテキスト（啓蒙書）の作成も、まだ諦めてはいませんので、こちらにも、ご支援を賜われれば、幸いです。

お問い合わせ先：

スポーツ社会心理学研究会事務局
杉山佳生
九州大学大学院人間環境学研究院
人間科学部門健康・スポーツ科学講座
sugiyama@ihs.kyushu-u.ac.jp

メンタルトレーニング・応用スポーツ心理学研究会 活動報告

高妻容一（東海大学）

この研究会は、国際メンタルトレーニング学会（ISMTE）と国際応用スポーツ心理学会（AASP）をモデルに、1994年にスタートし、現場での実践を目的とした情報交換会を全国各地で開催している。

本研究会は、現場の指導者や選手を対象に、スポーツメンタルトレーニング指導士・上級指導士・資格取得を目指す学生スポーツメンタルトレーニング研修生・現場の選手やコーチが情報の提供をし、ディスカッションや情報交換をしている。参加した選手や指導者が、研究会の内容を現場で実践してもらい、その結果をまた研究会で報告するという理論（研究）と実践（現場）のキャッチボールを目的としている。

2014年度は、東海大学研究会が毎週1回、関東地区、静岡県、愛知県、栃木県の各研究会が毎月1回、中京地区が不定期で年3回、横浜地区が不定期で年6回の開催をしている。残念ながら、北海道、沖縄、福井、秋田、長崎が毎月1回の研究会の休止をしているが、北海道支部会は、1月（札幌）、4月（新十津川）、12月（帯広）において、2日間の講習会を毎年開催して、各会場には200名以上の選手や指導者が参加している。また広島県のNPO法人が毎年1回の講習会を無料で開催することを決定し、2014年は第1回の開催をした。さらに、長崎県、山口県、秋田県には、各県の体育協会の依頼で、専属のメンタルトレーニングアドバイザーを置いて、依頼を受けたチームや選手の巡回指導や講習会等を開催している。加えて、研究会休止中の沖縄では、元メンバーからの依頼で、国体監督研修会等の講習会も開催した。最近では、研究会休止中の福井県の国体強化のプロジェクトが立ち上がり、2014年度は4回の講習会を実施し、2015年度は、年に12回の講習会を計画している。このように、本研究会に対する講習会の依頼が多くなり、メンタルトレーニングの普及活動の一環として、各メンバーが各地で講習会等を実施するようになってきた。特に、東京都は、2012年の東京オリンピックに向けてプロジェクトを作り、

2014年度は数回の講習会を実施し、2015年度からは本格的にメンタル面強化のサポートを依頼されている。

情報収集活動としては、研究会のメンバーがラスベガスで開催された国際応用スポーツ心理学会（AASP）に約10名が参加し、世界的な情報の収集をし、その報告を研究会で行った。またある競技のU15のコーチからの話題提供など、現場のコーチからの声を聴くことも実施して、加えてメンタルトレーニングを導入しているコーチから、メンタルトレーニング指導や心理的サポートに対する要望などを聞くセッションも実施し、サポートする側とサポートされる側の情報交換も実施している。

このような学会で取り上げられた内容を報告し、現場での話を聞き、その情報を発展させ、現場でどう応用するかという形式で研究会は開催されている。

基本的に、各研究会では、自己紹介を兼ねた情報交換が毎回30分～60分程度行われ、参加者や主催者側からの話題提供が行われ、同時にいくつかの心理的スキルや実先例に対してディスカッションが行われている。またスポーツメンタルトレーニング指導士・上級指導士の資格取得者からの話題提供や現場での実践例、さらに国際学会からの世界の最新情報などが報告されている。加えて、参加者の選手やコーチからの現場報告や話題提供、映像による試合や練習場面での報告から、その取り組みについてのグループディスカッションなどが盛んに行われている。研究会後は、懇親会等で参加者同士によるさらなる情報交換が毎回行われている。

会員や学生たちは、日本体育学会、日本スポーツ心理学会、日本スポーツメンタルトレーニング指導士全国研修会や各地区研修会、国際応用スポーツ心理学会等に参加し、その情報の提供や交換を研究会で実施している。本研究会は、現場のコーチや選手の参加が多いため現場での実践、競技力向上を目的とした情報交換（研究と現場・実践のキャッチボール）が盛んに行われている。

運動学習研究会 活動報告

増澤拓也（琉球大学）

第23回運動学習研究会は、2015年3月1日および2日の2日間にわたり、琉球大学教育学部50周年記念会館において開催されました。例年、運動学習研究会は6月から9月の夏期に開かれることが多いですが、昨年度はASPASPの関係で年度末の開催となりました。開催地への移動手段が実質飛行機しかない沖縄、さらには年度末の忙しい時期ということもあり、参加者が21名と例年に比べ若干少なめでしたが、演題数は14題と多くの方に発表いただき、研究会は大いに盛り上がったと感じております。

今回の研究会日程は、1日目お昼から2日目の夕方までの1日半というタイトなスケジュールであり、発表に関しては口答のみ30・45・60分の持ち時間でおこなわれました。本研究会は発表中でも研究の意図を理解するため逐次質問が飛び交い、持ち時間が過ぎても質問が止まらない程熱い議論が交わされます。座長・運営泣かせの進行スタイルですが、なるべく深く討議し合えるように柔軟に対応して進めていくことが、この研究会の特長といえます。昼間に議論しきれない場合もナイトセッションにて納得いくまで語りあいますが、今年の研究会においても夜的那覇を舞台に夜遅くまで論議が繰り広げられました。

参加者は、大学の体育系教員が多く占める中、半数近くが新進気鋭の大学院生であり、運動学習に対する熱い思いで研究会を盛り上げていました。今年度は臨床の分野から岐阜大学の鈴木壯先生が参加表明していただいたところからいつもと違った試みとして、「臨床スポーツ心理と運動学習」と題したシンポジウムの時間を設けました。名古屋大学の山本裕二先生に口火をきっていただき鈴木壯先生との対談をとおして、臨床からみた運動学習等について討議しました。残念ながらスケジュールの都合により十分な議論の時間を持てませんでした。同じ体育心理分野の研究領域として協同して活動する契機と

なる機会であったと思います。

最後に、本年度の開催時期・場所は未定ですが、下記の運動学習研究会のホームページに研究会情報が随時更新されますのでご覧ください。また、過去の演題に関しましても報告書としてまとめられ、閲覧可能ですのでご参照ください。それでは、これからの研究会においても多くの方々のご参加をお待ちしております。

運動学習研究会ホームページ

<http://www.htc.nagoya-u.ac.jp/~yamamoto/jmls/>



臨床スポーツ心理学研究会 活動報告

中込四郎（筑波大学）

本研究会は、1991年（第42回日本体育学会大会：富山大学）にスタートし、20年以上にわたって継続されてきた「臨床スポーツ心理学研究会」の発展的解消と位置づけ、新たに本年度より組織されました。これまでは、毎年行われている日本体育学会大会の開催期間中の中日の夕方を利用して、2時間枠での事例検討（1事例）を重ねて参りました。しかし、学会期間中であることにより、一部の会員の参加が困難となっていたことや、会場の手配が難しいこと、そして何より、「事例をもっとじっくり、そして1事例だけでなく多くの事例に接してみたい」といった参加者からの要望が寄せられていました。そこで、体育学会から本会を切り離し、宿泊を兼ねたプログラムを組み、さらに体育心理学専門領域の人たちだけでなく、他領域の人たちにも加わっていただく会の設立に至りました。その結果、このたび57名の会員登録がなされ、動き出しました。

衣替えした本研究会は、お気づきになられた方もおられるかもしれませんが、研究会名称に「学」を入れさせていただきました。個人的にはそこに大きな意味をもたせました。前身の会の発足当時は、15～20分の学会口頭発表時間では自分たちの成果を伝える上で時間が少なすぎることに、また、事例研究の意義を周囲に伝えたいとの思いが中心となっていました。それから20年以上が経過し、体育・スポーツ心理学領域での臨床的関わりが増え、単なる事例報告ではなく、そこでの経験を通して新たな知見を提示する研究も積み重ねられてきており、研究領域としての輪郭が引けたものと判断したことから、会の名称に「学」をつけさせていただきました。他の研究領域にも言えることですが、研究の質を上げる上で、この領域では他よりも、研修機会の充実が重要となっています。したがって、本会は事例に接するだけで満足することなく、心理臨床力の向上につながるような関連の理論や技法、さらには周辺領域での知見等に関わる実習やレクチャーもプログラムに組み込むことを考えました。

初回である今回の研究会の概要は以下の通りです。会場は、鈴木壯先生（岐阜大学）のご好意により、

岐阜大学サテライトキャンパスを利用させていただきました。岐阜県は地理的に本州のほぼ中央に位置し、しかもその施設はJR岐阜駅前にあり、遠方から参加された会員にとってもアクセスし易い場所でした。

<研究会プログラム>

10/25 12:30～ 受付

研究会発足の主旨説明：中込四郎

セッション① 13:00～15:30：事例検討

事例提供者：中込四郎（筑波大学）「女性の部屋の“覗き”を繰り返した男子アスリートの事例
— “覗く” ことのもつ意味—

指定討論者：鈴木 壯（岐阜大学）

セッション② 16:00～18:00：講義及び質疑

講師：豊田則成（びわこ成蹊スポーツ大学）

「質的研究の方法と範囲」

10/26

セッション③ 9:00～11:30：事例検討会

事例提供者：秋葉茂季（国立スポーツ科学センター）「試合中周りがみえなくなると訴えてきた
ジュニアエリートアスリート」

指定討論者：中込四郎（筑波大学）

セッション④ 11:40～12:10：海外動向

報告者：鈴木 壯（岐阜大学）「国際応用スポーツ心理学会（AASP）大会参加報告」

※ 司会：岸 順治（岐阜経済大学）<全セッション担当>

上記のプログラムに基づき、両日ともに演者を含めた活発な討議の中、事例研究や質的研究への理解を深め、そして個別事例に基づくアプローチの意義を共有することができました。会員個々においては、狭義の相談室に限定せず、今後さらなる心理臨床の場の拡大の必要性を再確認し、次年度の第2回研究会開催が約束され、本会は第一歩を踏み出しました。

スポーツ動機づけ研究会 活動報告

川田裕次郎（順天堂大学）

2014年5月17日（土）～18日（日）に第12回スポーツ動機づけ研究会が開催されました。会場は、名古屋大学の野依記念学術交流会館です。今回の研究会の特徴は、若手の研究者の発表でした。

シンポジウムでは、「やる気のルーツを探る！：やる気はどこから生まれるの？」というテーマで、西田保先生、佐々木万丈先生、藤田勉先生より研究者の視点から、ラグビーの指導をされている高田正義先生より現場の視点から話題提供がありました。高田先生は、ニュージーランドのKen Hodge先生の下で学んだ経験があり、ご自身もラグビーの指導をされていて示唆に富むお話をお聞きすることができました。ラウンド・テーブル・ディスカッションでは、「動機づけ研究の魅力と今後の期待：若手研究者の立場から」というテーマで、北村勝朗先生と若手研究者を中心に山崎芙美子先生、永尾雄一先生、西垣景太先生、川田裕次郎が担当しました。ここではそれぞれの視点を持ち寄り参加者全員で活発な議論を行いました。また、アイスブレイクでは、永田直也先生と織田郁子先生による身体活動を伴うゲームを行いました。一瞬にして周りの人と打ち解けてしまう雰囲気づくりは大変参考になりました。一般発表では、若手研究者を中心に9つの研究発表（上村明先生、平間康允先生、永尾雄一先生、藤田勉先生、来間千晶先生、内田遼介先生、沖和砂先生、織田郁子先生、遠藤伸太郎先生）がありました。それぞれのテーマで疑問に思っていることや確認したいことなどを中心に発表が進んでいきましたので、参加者からは多くの意見やアドバイスが上げられ時間の流れるのがとても早く感じられました。重複しますが、以下に演者と発表演題を記載しておきます。

スポーツ動機づけ研究会は、年に1回開催されています。院生や若手研究者も自由に議論できる雰囲気づくりで開催されていますので、広い意味で動機づけに興味がある方は、ぜひご参加下さい。

<企画>

1. シンポジウム「やる気のルーツを探る！：やる気はどこから生まれるの？」

司会：西田 保（名古屋大学）

演者：佐々木万丈（日本女子体育大学）

演者：藤田 勉（鹿児島大学）

演者：高田正義（愛知学院大学）

2. ラウンド・テーブル・ディスカッション「動機づけ研究の魅力と今後の期待：若手研究者の立場から」

司会：北村勝朗（東北大学）

演者：川田裕次郎（東京未来大学）

演者：山崎芙美子（北九州市立大学）

演者：永尾雄一（日本障害者スポーツ協会）

演者：西垣景太（中部大学）

3. アイスブレイク

永田直也（慶應義塾大学）

<口頭発表>

①Athlete BurnoutとAthlete Engagementの関連 上村明（順天堂大学大学院）、②中学生の体力と動機づけの関係について 平間康允（札幌国際大学）、③モチベーションビデオにおける映像以外の構成要素の心理的影響を探るために 永尾雄一（日本障害者スポーツ協会）、④スポーツ動機づけ尺度の検討 藤田 勉（鹿児島大学）、⑤「気持ち切れた」アスリートと動機づけ 来間千晶（広島大学大学院）、⑥個々の集合的効力感と努力量の関連性に対する能力差の影響 内田遼介（大阪大学）、⑦プロスポーツ選手の競技意欲とメンタルヘルスの関係について 沖 和砂（順天堂大学大学院）、⑧競技スポーツチームにおける動機づけ雰囲気について 織田郁子（東海大学大学院）、⑨アスリートの謙虚な思考に関する基礎的研究 遠藤伸太郎（中央大学）

本研究会の連絡先は、下記の通りです。

西田 保 先生 tamotsu@dpc. agu. ac. jp

Ⅲ. 研究室紹介

研究室紹介 金沢大学 身体運動心理学研究室（村山孝之研究室）

村山孝之（金沢大学）

当研究室は、金沢大学大学院教育学研究科に所属する教員と院生の研究チームであり、体育、スポーツや日常生活における運動行動を心理学の視点から研究しております。例年2～5名程の院生が当研究室で研究していますが、人数から言えば、決して大きなチームであるとはいえません。指導教員の現所属が保健管理センター（本学における旧教養部の所属）であるため、学部生が心理学を学びたくとも、残念ながら受け入れができないためです。しかし、一般教養や学部の専門授業（学内非常勤で村山が担当）で運動心理学の授業を受講した学生の中には、大学院で心理学を学びたいと相談してくる学生もおります。非常にうれしいことです。やはり本学においても心理学に興味・関心のある体育・スポーツ系の学生は多いようです。現在は、県外の国立大学を卒業した院生や、石川県内の小中高の現職教員が数名、当研究室と一緒に研究しています。

文字通り、教員養成系の研究科に属していますので、院生の多くは小中高の教員を志望しております。しかし、将来的に研究者を目指したいという院生もみられます。これまでの修了生は、現在、大学や高等専門学校、小学校などに教員として勤務しております。学校体育や部活動での運動指導に関心のある院生が多いため、当研究室では運動学習を主とした熟達化に関する研究やプレッシャー研究、メンタルトレーニングの研究を進めています。教員、指導者を目指す者にとってはいずれのテーマも重要であるため、指導教員も院生も一緒になって実験し、現場の声を聞き、チーム全体で心理学を楽しんでおります。

近年は特にQuiet Eyeの機能や有用性に着目した研究を進めております。昨年は、機会をいただいて英国で約7か月間QEに関する研究を行うことができました。現在は視線の操作を学校体育やスポーツ場面での運動スキル習得やプレッシャー対策に利用す

る効果的な方法について、英国の共同研究者と協力しながら実験的に探っております。アイトラッキングシステムやハイスピードカメラ、脳機能イメージング装置などの機器を用いながら知覚系と運動系の関係を解明する研究は、一見すると運動学習研究に見えますが、メンタルトレーニングプログラムの開発にもつながります。もちろん、注意、フィードバック、イメージ、観察学習などに関する研究もしておりです。そのため、当研究室では運動やスポーツの実践場面で生じる問題を様々な視点から捉えるようにしております。また、学内の生理学・生化学やバイオメカニクスが専門の先生とも協力し、互いの専門性を生かした“心技体”の研究コラボレーションも計画しております。加えて、医科学サポートで関わっているオリンピック選手やプロ選手も心理学実験に非常に関心があるため、研究に積極的に協力してくれることもあります。専門や立場は違いますが、互いに協力しながら有意義な研究をしよう、競技に有用な知見を一緒に見出そうという共通意識を持った者同士が、現実に協力できる環境が整ってきました。小規模の研究チームにとっては非常にありがたいことです。

ゼミは週一回行っており、論文発表や研究計画の発表が主です。国内外の研究動向を把握しながら、求められている研究課題や具体的な研究方法について検討しています。緊張感もありますが、鋭い意見や非常に興味深い意見が出たときにはゼミ全体が非常に盛り上がります。大切にしているのは、研究と現場を常にリンクさせて発表すること、聞くことです。将来的に教員になりたい院生ばかりですから、ゼミ中は、「この知見はどんな場面で活用できるのだろうか」、「こういう状況では心理学を生かしてどのように対応できるのだろうか」と、現場をイメージしたディスカッションが頻繁に行われます。学外から研究者をお招きすることもありますし、教員

養成系という組織の性格を生かし、学外の現職教員にゼミに加わってもらうこともあります。見方が違うとやはり新たな発見があり、私自身も非常に勉強になります。

また、北陸は一年を通して雨が多いため、晴れて気持ちの良い日は屋外に出て青空ゼミをすることもあります。天候が北陸に似た英国でも、晴れの日には屋外でディスカッションすることがありますので、真似たいと思っています。大学を飛び出して、兼六園の中でディスカッションしたこともあります。皆で身体を動かしながらざっくばらんに研究の話をしていると、ディスカッションもしやすく、やはり研究アイデアも生まれやすくなります。エクササイズにもなり、一石二鳥です。研究室メンバーと一緒に河川沿いを走ったり、バドミントンをしたりすることもあります。2015年11月に開催予定の「第一回金沢マラソン」にも研究室メンバーでエントリーしました。冬は、スキーの授業に研究室メンバーも補助として参加し、指導者、学習者の視点からスキー授業を体験します。金沢という地域特性を生かして、自然の中でスポーツをすることの醍醐味を研究室全体で味わって楽しんでいます。運動心理学のゼミですから、やはり我々自身が運動・スポーツを楽しみながら、心と身体を好循環させることを忘れてはなりません。

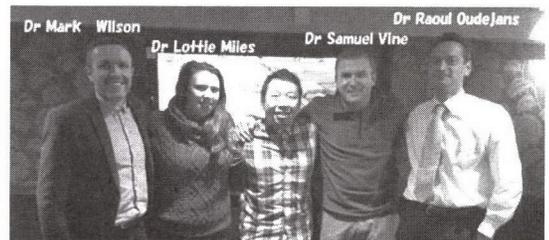
このような学問を楽しむ、実践を楽しむという素養は、教員を目指す院生にとっては不可欠なものです。それは持って生まれたものというよりもむしろ、経験の中で自ら感じ、身に付けていくものといえます。私は院生時代に関矢先生や石村先生のゼミで学びながら教えていただきました。同じように、私も当研究室の院生には研究室活動を通して学問することや実践することの重要性を学び、そして醍醐味を理解してほしいと思っています。

北陸新幹線が開通し、金沢、石川は今、活気にあふれています。新幹線開通前と開通後では街の雰囲気が大きく変わりました。街にはたくさんの外国人観光客がみられ、英語が飛び交っています。ショッピングセンターや飲食店、娯楽施設は建設ラッシュ

です。加賀百万石の古き良き武家文化を残しながら、モダンで新しい金沢文化が形成されつつあります。金沢はどちらかといえば保守的な街ですが、今は日々変化していることを実感できます。街だけでなく、そこに住む人の気質もどこか変化しているようにも感じます。当研究室も、トライアンドエラーを恐れることなく、社会に役立つ心理学研究を目指して積極的に挑戦していきたいと考えております。今後も引き続き、学会や研究会を通して、多くの先生方にご指導・ご鞭撻をいただければ幸いです。お近くにお越しの際には、当研究室にお気軽にお立ち寄りください。

金沢大学身体運動心理学研究室ホームページ

<http://tmurayama.w3.kanazawa-u.ac.jp/index.html>



エクセター大学の研究者たちと



実験室にて

IV. 学位論文紹介

スポーツ・コミットメント形成モデルの構築 —ソーシャルサポートの授受と競技者アイデンティティーの関連を基軸として—

萩原悟一（日本経済大学）

学位：博士（学術），授与機関：九州工業大学

取得日：2014年9月22日，指導教員：磯貝浩久准教授

近年、スポーツ実施・継続化を説明、評価する際にスポーツ・コミットメント理論が援用されている。スポーツ・コミットメントはスポーツ実施行動や継続意図を評価する重要な要因であることが示されている一方、その形成過程については、わが国では、ほとんど取り扱われていない。そこで、本研究では、スポーツ・コミットメントの形成過程に着目し、その形成過程として社会的環境を評価するソーシャルサポートの授受と競技者の心理的側面である競技者アイデンティティーの関連を基軸とした青年期競技者におけるスポーツ・コミットメント形成モデルを構築することを目的とし検討を実施した。

第1章では、わが国におけるスポーツ実施に関する現状から、青年期における競技スポーツの実施・継続行動を体系的に示す意義、およびスポーツ実施・継続行動に関連するこれまでの先行研究および、スポーツ・コミットメント、ソーシャルサポート、競技者アイデンティティーという3つの概念を整理し、それらの関連性を示した先行研究を概観した。

第2章では、競技者のスポーツ・コミットメントを測定する評価方法を確立するため、競技スポーツにおけるスポーツ・コミットメント尺度の日本語版を作成し、その信頼性と妥当性を確認した。また、スポーツ・コミットメントはスポーツ参加頻度との関連が指摘されていることから、スポーツ参加活動状況とスポーツ・コミットメントとの関連について検討を行った結果、スポーツ参加活動状況との関連性を示したことから、わが国の競技者でも十分に援用が可能な尺度であることが示された。わが国では、今まで競技者のスポーツ・コミットメントを測定する評価尺度が開発されていなかったことから、本章で作成した尺度は今後、様々な研究で活用されることが期待される。

第3章では、チームメイトとの関係性から生起す

るソーシャルサポートの授受を測定する評価方法を確立した。青年期の競技者は部活動などに属している場合が想定されるため、組織内のチームメイトとの関係性から生起する相互作用に着目したソーシャルサポートの評価法を検討し、信頼性と妥当性を十分に有するソーシャルサポート提供・受領尺度が作成された。また、作成したサポート提供・受領尺度を用い、ソーシャルサポートの授受状態とチームとの関わりや心身の状態との関連を検討した。わが国のスポーツ科学分野において、ソーシャルサポートの受領に着目した研究は行われているが、ソーシャルサポートを提供することに着目した研究は今まで行われていなかった。本章では、ソーシャルサポート提供についても評価することのできる尺度を作成したことから、今後、わが国においてもソーシャルサポートの提供に着目した研究を行うことができると思われる。また、本章ではソーシャルサポートの提供および受領を評価できる尺度を作成したことから、今後、チームメイトとの関係性に着目した研究の発展が期待される。

第4章では、スポーツ・コミットメント形成モデルの媒介要因とされる個人の心理的側面である競技者アイデンティティーを測定する評価方法を確立した。競技者アイデンティティー尺度の日本語版尺度の信頼性と妥当性を再度確認し、競技者アイデンティティー形成を発達の視点、および競技レベルとの関係について検討を行った。競技者アイデンティティー尺度の有用性が確認されたことにより、今後、わが国における競技者アイデンティティーに関する研究の発展が期待される。

第5章では、本研究で作成した評価尺度を用い、スポーツ・コミットメント形成モデルの検討を行った結果、チームメイトとのソーシャルサポートの授受が、競技者アイデンティティーを形成し、そして、

競技者アイデンティティーがスポーツ・コミットメント形成の規定要因となっていることを体系的に示めすモデルが確立された。また、このモデルを用い、実際のスポーツ実施状況との関係性および、チーム内での地位別にスポーツ・コミットメント形成過程の差異を明らかにした。

第6章は総括とし、本研究で得られた結果を整理し、それに基づいて総合的考察を実施し、今後の研究の展望について述べた。

本研究では、競技スポーツを実施している青年期の競技者を対象に調査を実施し、社会心理学的観点からスポーツ実施・継続意図のメカニズムを明らかにした。わが国では、スポーツ・コミットメントの形成について体系的に心理的プロセスを捉えた研究は今まで行われていなかったことから、本研究の知見はわが国の青年期におけるスポーツ実施・継続のメカニズム解明の一考察となりうるであろう。すなわち、スポーツ・コミットメントの形成過程を捉えることで、人々の行動プロセスをモデル化し、青年期において競技スポーツを積極的に行っている人々がどのような心理的プロセスをもってスポーツへ傾倒しているかの傾向を明らかにすることにより、青年期の競技スポーツ実施者を増加させる一要因を検討することが可能になったと思われる。また、本研究では、競技者アイデンティティーの形成要因としてソーシャルサポートという社会的要因を測定した。競技スポーツ実施・継続を促進するうえで重要な競技者アイデンティティーの形成のためには、青年期の競技者にとってチームメイトにソーシャルサポートを提供することが競技者としてのアイデンティティー形成に重要であることが示唆された。すなわち、自ら積極的にチームメイトにサポートを提供することが競技者としての役割アイデンティティーを高め、そして、競技スポーツに積極的に関わっていることが示された。わが国では伝統的に指導者やコーチは競技スポーツの技術やスキルを教え込むことが指導の基礎となつて行われ、競技者は指導者に教え込まれたことを着実に実施することが技術やパフォーマンスの向上につながると考えられている。その一方

で、競技者は常に受け身の状態となり、自らが考え行動することがなくなるという問題点も指摘されている。また、受け身の状態で競技を継続するとその競技者はやがて競技に対するストレスや無気力感を感じ、競技を辞めてしまうことなども起こっている。このような現状を改善するためにも本研究で得られた知見、すなわち、競技者自らが積極的にチームメイトにサポートを提供することが、競技者としての役割を自覚させ、競技実施行動を促進するというプロセスは有益な情報となり得ると考えられる。競技者自身が積極的にかつ自発的に競技スポーツに関わるソーシャルサポートをチームメイトに対して行うことを指導者やコーチが促進することが求められるであろう。

筋運動感覚残効が運動パフォーマンスに及ぼす影響

兄井 彰 (福岡教育大学)

学位：博士 (学術) 授与機関：九州工業大学

取得日：2014年9月24日 指導教員：磯貝浩久准教授

問題の背景と目的

本論文は、スポーツにおける錯覚の一つである筋運動感覚残効と運動パフォーマンスの関係を検討することが目的であった。この筋運動感覚残効とは、先行して行われた運動によって後続の運動に知覚的な変容 (歪み) が生じる現象のことである。本論文では、スポーツにおける錯覚について、これまで実験的研究が行われていない理由を明確にし、筋運動感覚残効と運動パフォーマンスの関係を検討するための実験的枠組みを提示した。この実験的枠組みに従い、筋運動感覚残効が生じやすいと考えられる陸上競技の投てき種目の砲丸投げを運動課題として、重さの異なる砲丸を投げることで生じる筋運動感覚残効がパフォーマンスに及ぼす影響について検討することを目的とした。

問題の所在

第1章及び第2章では、スポーツにおける錯覚に関係する文献を展望し、その生起要因を明らかにした上で、スポーツにおける錯覚の代表的な1つである筋運動感覚残効について解説し、筋運動感覚残効と運動パフォーマンスの関係を検討するための問題点と実験的枠組みを提示した。

重さの筋運動感覚残効が砲丸投げのパフォーマンスに及ぼす影響

第3章は、筋運動感覚残効が生じやすいと考えられる砲丸投げにおいて、重さの異なる砲丸を投げることにより、砲丸が軽くあるいは重く感じる筋運動感覚残効が生じるかについて特定し、投てき距離に及ぼす影響について検討するために、実験1を行った。仮説は、重い砲丸を投げると、砲丸を軽く、投げやすく感じる筋運動感覚残効が生じ、投てき距離が向上する。また、軽い砲丸を投げると、砲丸を重く、投げにくく感じる筋運動感覚残効が生じ、投てき距離が低下する (筋運動感覚残効とパフォーマンスへの影響の特定) というものであった。実験の結果、先行運動で5.45kgの重い砲丸を投げると、後続運動において、砲丸を軽く、投げやすく感じる筋運動感覚残効が生じ、投てき距離が長くなり、パフォ

ーマンスが向上した。しかし、先行運動で2.72kgの軽い砲丸を投げると、後続運動において、砲丸を重く、投げにくく感じる筋運動感覚残効が生じたものの、投てき距離に差は見られず、パフォーマンスに変化は見られなかった。このことから、重さの異なる砲丸を投げることで、筋運動感覚残効が生じ、重い砲丸を投げた後ではパフォーマンスに良い影響を及ぼすと考えられる。

先行運動の回数が筋感覚運動残効と砲丸投げのパフォーマンスの及ぼす影響

第4章では、重さの異なる砲丸を投げることで生じる筋運動感覚残効の大きさや投てき距離への影響が、先行運動の投てき回数の違いにより、どのように変化するかについて検討するために実験2を行った。仮説は、重い砲丸を投げる回数が増えると、より砲丸を軽く、投げやすく感じる筋運動感覚残効が生じ、投てき距離が向上する。また、軽い砲丸を投げる回数が増えると、より砲丸を重く、投げにくく感じる筋運動感覚残効が生じ、投てき距離が低下するというものであった。実験結果、先行運動の投てき回数に関係なく、先行運動で5.45kgの重い砲丸を投げると、後続運動において、砲丸を軽く、投げやすく感じる筋運動感覚残効が生じ、投てき距離が長くなり、パフォーマンスが向上した。しかし、先行運動で2.72kgの軽い砲丸を投げると、後続運動において、砲丸を重く、投げにくく感じる筋運動感覚残効が生じたものの、投てき距離に明確な差は見られず、パフォーマンスに変化は確認できなかった。このことから、重い砲丸を投げた後では、筋運動感覚残効が生じ、パフォーマンスの向上が見られるが、軽い砲丸を投げた後では、筋運動感覚残効が生じ、明確なパフォーマンスに変化は見られないと考えられる。

砲丸の重さの違いが筋運動感覚残効とその持続回数及びパフォーマンスの及ぼす影響

第5章では、重い砲丸を投げることで生じる筋運動感覚残効の大きさやその投てき距離への影響が、先行運動の強度、すなわち、投げる砲丸の重さの違

いにより、後続運動において、どのように経時的に変化するかについて検討するために、実験3を行った。仮説は、先行運動で投げる砲丸の重さが重いほど大きな筋運動感覚残効が生じ、それに対応して投てき距離も向上する（先行運動の強度の特定）。また、筋運動感覚残効及び投てき距離への影響は、経時的に変化し、後続運動の投てき回数が増えると小さくなるというものであった。実験結果、先行運動で5.0kg及び6.0kgの重い砲丸を投げると、後続運動で砲丸を軽く、投げやすく感じる筋運動感覚残効が生じ、投てき距離も一過性ではあるが長くなり、パフォーマンスが向上した。また、筋運動感覚残効は、先行運動直後及びより重い砲丸を投げた後の投てきで大きく、その効果は経時的に小さくなった。このことから、重い砲丸を投げると、後続運動において、基準運動よりも、砲丸を軽く、投げやすく感じる筋運動感覚残効が生じ、投てき距離も一過性ではあるが長くなり、パフォーマンスが向上すると考えられる。しかし、先行運動で投げる砲丸が重いほど大きな筋運動感覚残効が生じ、それに対応して投てき距離も向上するという事は確認できなかった。

先行運動と後続運動の時間間隔が筋運動感覚残効と砲丸投げのパフォーマンスに及ぼす影響

第6章では、重い砲丸を投げることで生じる筋運動感覚残効の大きさやその投てき距離への影響が、先行運動から後続運動までの時間間隔の違いにより、どのように変化するかについて検討するために、実験4を行った。仮説は、筋運動感覚残効及び投てき距離への影響は、先行運動の直後が最大で、先行運動から後続運動までの時間間隔が長くなると小さくなる（先行運動から後続運動までの時間間隔の特定）というものであった。実験結果、先行運動で6.0kgの砲丸を投げた直後の投てきでは、1分後及び3分後の投てきよりも、砲丸を軽く感じる筋運動感覚残効が生じていた。しかし、砲丸の投げやすさは、先行運動から後続運動までの時間間隔による差は見られなかった。また、投てき距離でも、重い砲丸を投げると、パフォーマンスが向上したが、先行運動から後続運動までの時間間隔による差は見られなかった。このことから、先行運動直後から3分後までは、砲丸が軽く、投げやすく感じる筋運動感覚残効が生じて、パフォーマンスが向上すると考え

られる。

総括的考察

第7章では、基準の重さの砲丸を投げると、砲丸が軽く、投げやすく感じる筋運動感覚残効が生じ、投てき距離の向上が見られることについて考察を加えた。砲丸投げにおいて、重い砲丸を投げることで筋運動感覚残効が生じ、パフォーマンスの向上する理由として、次の2つの可能性を提示した。その第一の理由としては、高強度の準備運動による活動後増強（PAP）が、パフォーマンスの向上に作用した可能性である。この活動後増強とは、筋に重い抵抗をかけて行った運動の後に見られる筋出力の即時的な増強、あるいは、それまでの筋活動によって、その後の筋力発揮に向上が見られる現象と捉えられている。この筋の活動後増強から本研究の結果を解釈すると、先行運動で重い砲丸を投げることが準備運動となり、活動後増強により筋の出力が増強され、後続運動で投てき距離が向上したといえる。また、パフォーマンスが向上するもう一つの理由としては、筋運動感覚残効が生じることにより、当該状況を運動遂行にとって有利に知覚し、そのことによりパフォーマンスが向上した可能性が考えられる。この当該状況を運動遂行にとって有利に知覚することから本研究の結果を解釈すると、重い砲丸を投げることによって、後続運動で、砲丸が軽く、投げやすく感じ、参加者が当該状況を運動遂行にとって有利だと知覚し、投てき距離が向上したといえる。おそらく、当該状況を運動遂行にとって有利だと知覚することにより、運動に対する動機づけが高まり、パフォーマンスが向上したと推察できる。以上、砲丸投げにおいて、重い砲丸を投げることで筋運動感覚残効が生じ、パフォーマンスの向上が見られた理由について二つの可能性を示した。しかし、本研究の結果を、活動後増強と状況を運動遂行にとって有利に知覚することのどちらか一方だけで説明することはできないと思われる。おそらく、筋運動感覚残効が生じ、パフォーマンスが向上する理由として、活動後増強と状況を運動遂行にとって有利に知覚することの両方が関与していると推察される。

熟練者の予測スキルに対する運動シミュレーションの貢献と 同時模倣トレーニングによる予測スキル習得の可能性

畠中智志（杏林大学医学部統合生理学）

学位：博士（体育学） 授与機関：鹿屋体育大学

取得日：2015年3月24日 指導教員：森司朗教授

様々なスポーツ競技において、競技者は知覚した情報を基に厳しい時間制約の中で多くの事象へ対応することが求められる。この時間的制約を回避するために、各競技の熟練者は、優れた予測スキルを習得していることが知られている。近年、予測スキルに関わる中枢の働きとして、運動と知覚の双方向結合を特性に持つミラーニューロンシステム（MNS）の活性による運動シミュレーションの関与が示唆されている。しかし、この関与については、脳画像研究にみられるように間接的な根拠に留まり、直接的な影響（たとえば、運動シミュレーションの妨害による予測の精度の低下）については示されていない。また、MNSの特性の獲得には運動経験が必要とされているにも関わらず、従来の研究では、視覚経験を積む（運動経験を伴わない）知覚トレーニングによって、予測の精度が向上することが報告されている。そこで本研究では、MNSの特性である運動と知覚の双方向結合の考えを基に、観察と同時に行われる運動実行が予測の精度に及ぼす影響の検討を行い、予測スキルの習得過程において、MNSの特性を獲得させ得る模倣運動の効果を検証することで、熟練者の予測スキルの中枢メカニズムとしてMNSの活性による運動シミュレーションが貢献していることを明らかにすることを目的とした（第1章）。

第2章において、上記の目的を達成するために行った5つの実験結果について報告した。バスケットボールの熟練者と初心者を対象に、第1実験では、フリースローの結果予測を課題とし、運動を伴わない状態で予測を行う通常の条件の他に、観察と同時の運動実行（フリースロー動作と一致する運動、あるいは不一致な運動）の条件下で行わせた。その結果、熟練者は、視覚入力情報を基に生成される運動シミュレーションとは異なる不一致な運動を伴った場合に予測の精度が低下した。この結果は、観察に

よって生成される表象（知覚表象）と運動実行によって生成される表象（運動表象）が一致しなかったために、両者の間に干渉が起き、運動シミュレーションの生成が阻害された結果と考えられる。一方、初心者は一致する運動を行うことで予測の精度が向上した。これは、知覚表象と運動表象が一致することによって、運動シミュレーションの生成が促進されたと考えられる。また、これらの結果は、予測の対象となった映像のモデルの投射腕と同様の右手の運動実行においてのみ示され、左手の運動実行では示されなかった。したがって、予測と運動を同時に行うことによる注意の分散（二重課題）による影響ではないことを示すとともに、熟練者がシミュレートしている運動は、シュートリリースが行われる右手の掌屈運動そのものであることを示唆している。次に第2実験では、第1実験で用いられた一致する運動に関して、運動シミュレーションの生成のために必要な視覚入力情報に注意を向ける模倣運動と、運動シミュレーションの生成を阻害するために観察者自身の内的情報に注意を向ける運動に分け、予測の精度を比較した。その結果、第1実験と同様に熟練者は観察した動作情報以外に注意を向けた運動実行時に予測の精度が低下し、模倣運動では運動を伴わない通常条件との間に差はみられなかった。また初心者は、模倣運動実行時のみ予測の精度が向上した。さらに第3実験において、第1、第2実験で実施した運動を含む条件下での予測時の脳波の測定を行い、MNSの活性による運動シミュレーションの関与を生理学的指標で評価したところ、熟練者と初心者の中にMNSの活性に差はみられなかったものの、模倣運動実行時が他の運動実行時よりも活性の程度が高かった。MNSの双方向結合の特性に則したこれらの結果は、第1実験で示された予測スキルに対する運動シミュレーションの貢献を支持するとともに、

予測の精度を向上させるための方法の提案について、模倣運動の有効性を示唆するものであった。

第4実験においては、初心者を対象に予測スキル習得に対する同時模倣トレーニング（模倣Tr）の効果を検証するために、従来の視覚経験のみを行う知覚トレーニング（知覚Tr）を含む他のトレーニングとの比較を行った。なお、トレーニングによってMNSの活性による運動シミュレーションが行われるようになれば、MNSの特性である双方向結合の影響として、運動パフォーマンスへの転移の効果もみられると予想されたことから、トレーニング前後で予測の精度とフリースローパフォーマンスの測定を行った。その結果、予測の精度に関しては、知覚Trを超える模倣Trの有効性は示されなかったが、フリースローパフォーマンスへの転移に関しては、模倣Trの効果がみられた。これより、運動経験を伴う模倣運動の有効性が示され、運動シミュレーションの獲得が予測スキルの習得に寄与することが示唆された。しかしながら、第4実験では、視覚経験と運動経験を区別して検証を行うことができなかった。そこで第5実験では、視覚経験が同一になるよう熟練者を対象に、運動経験が少なく、かつ予測の精度が劣る左のシュートフェイントに対してトレーニングを行い、予測の精度とMNSの活性の程度を測定した。その結果、視覚経験を超越する効果は認められなかったものの、予測の精度とMNSの活性の程度は向上を示した。以上の第4、第5実験の結果は、模倣運動によって獲得される運動シミュレーションが予測スキル習得に寄与する可能性を示したといえる。

以上の実験の結果をもとに、第3章では、熟練者の予測スキルに対する運動シミュレーションの貢献、および同時模倣トレーニングによる予測スキル習得の可能性という観点から総括論議を行った。本研究の結果は、MNSの活性が熟練者の予測の中核として関与しているとしたこれまでの研究を強く支持し、熟練者の予測スキルの中核メカニズムとしてMNSの活性による運動シミュレーションが貢献していることを示唆するといえる。本研究における新規な知見として、①スポーツ競技場面の予測の精度に関して、

観察と同時の運動実行が影響を与えるという直接的な動作の識別の妨害（あるいは促進）を示したこと、②熟練者の予測時のMNSの活性に寄与する情報源は、予測の対象となる動作の観察から得られる視覚入力情報であり、他者の動作が脳内に表象されているということ、③予測時に、模倣を意図しながら同時に模倣運動を行うことによる一過性の影響として、動作の識別精度が高められること、そしてさらに、④模倣運動を取り入れたトレーニングにおいて、運動経験が少ない動作の予測の精度の向上、および運動パフォーマンスそのものが向上したことが挙げられる。

以上より、結論として、熟練者の予測に関する運動シミュレーションの貢献を直接的に示し、予測スキルの習得に関して新たな視点からの提案が行われた本研究は、スポーツ競技における予測スキルに関する本質的理解を深め、学習方法の発展の可能性を示す知見となり得るといえる（第4章）。

付記：本論文を完成させる上で、鹿屋体育大学の森司朗先生、中本浩揮先生、幾留沙知先生にご指導を賜りました。心より厚くお礼申し上げます。

V. 海外情報

モンペリエ第一大学（仏）EuroMov研究所への留学

三浦哲都（東京学芸大学大学院）

私は、日本学術振興会特別研究員PDとして、任期の2年目（2014年4月から2015年2月まで）の10ヵ月間、南フランスのモンペリエという都市にある、モンペリエ第一大学EuroMov研究所で研究活動を行ってきました。モンペリエはパリから飛行機で一時間ほどの距離で、地中海から10kmほど、マルセイユまで168kmの距離の都市です。典型的な地中海性気候で、夏は暑いですが乾燥していて過ごしやすく、夜9時まで太陽が沈まない場所です。

モンペリエ第一大学のEuroMov研究所は、2013年に欧州連合や国のサポートを受けて設立された身体運動科学の研究機関です。EuroMov研究所は、コの字型の建物の中に研究部門と企業が同じ建物の中に併設されており、研究部門はNeuroplasticity & Rehabilitation、Complexity & adaptability、Rhythm & Synchronizationの3部門に分かれています。Neuroplasticity & Rehabilitation部門の研究者は、近くの病院で主に実験を行っており、運動障害について研究を進めています。そのほかの2部門は、EuroMov内の研究施設で実験を行っています。特に目を引くのが、i-moseという数メートルの実験機器です（図1）。i-moseは数メートルのロボットアームの先に、人が1人乗れるようなプラットフォームが接続していて、まるで遊園地の乗り物のような実験設備です。そのプラットフォームにはフォースプレートや、トレッドミル、または前面にバーチャルリアリティーを映せるスクリーンがついた個室などを装着することができ、様々な実験を行うことができます。

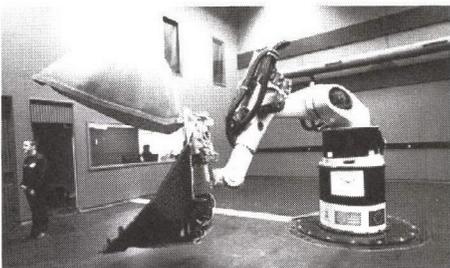


写真1 実験装置 i-mose

私はEuroMov研究所の設立者であり、DirectorでもあるBardy Benoit教授の研究室で研究活動を行っていきました（図2）。私はこれまでダンサーを対象とし、知覚と運動の協調に関する研究を行ってきました。

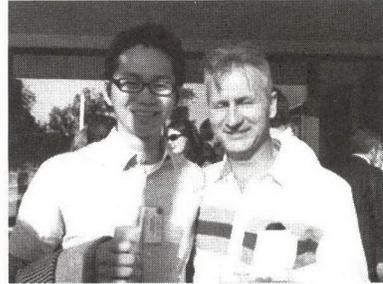


写真2 左が私で、右がBardy教授

EuroMovでは、Rhythm & Synchronizationという部門に参加し、AlterEgoという運動同期と社会性との関係を調査するプロジェクトに関わりました。AlterEgoプロジェクト (<http://www.euromov.eu/alterego/homepage>) では、統合失調症患者や、対人不安を持つ患者が他者と運動を同期する時に、どのように振る舞うかを調査します。さらにそれらの患者と運動を同期するアバターやロボットを開発し、それらの治療に役立てることを目的としており、ヨーロッパの他の複数の研究機関と合同でプロジェクトを進めています。EuroMovでは、主に人と人の運動協調、人とアバターの運動協調を担当し調査しています。これまでのEuroMovの研究グループの研究結果から、対人不安を持つ患者は、他者との運動同期する際に、相手の運動をうまくリードできないことがわかりました (Varlet et al., 2014)。また運動を協調させる相手の顔が好ましい場合、その人とはうまく運動を協調させることができることもわかりました (Zhong et al., 2015)。これらの研究から運動を同期させる人の心理状態や、相手への気持ちりが運動同期の振る舞いと関わっていることが明らか

になってきました。私のこれまでの先行研究では、ダンスの基本動作であるリズムカルな膝の屈伸運動を行ってききましたが、この膝の屈伸運動を2者向かい合って行い、相手の運動へと引き込まれる様相と、2者の心理指標との関連を調査してきました。帰国ギリギリで実験を終わらせたため、まだすべて解析を終えていませんが、運動同期後は自他の境界が曖昧になることが、心理指標から明らかになりました。研究所内での会話はほとんどが英語でした。研究所では、K.Torre博士と同じ部屋にデスクを頂きました。朝研究所へ行き、Bonjour, cava?とフランス語で挨拶を交わし、必ず毎朝握手をするのがフランスの挨拶でした。研究所の近くにはレストラン等もないため、コの字型の建物の中庭に集まり（図3）、そこで持参したランチを食べていました。EuroMov研究所は、夜10時から朝5時までの時間に居ると、警報が鳴るようになっており、暗くなる前にはだいたい皆さん帰宅していました。

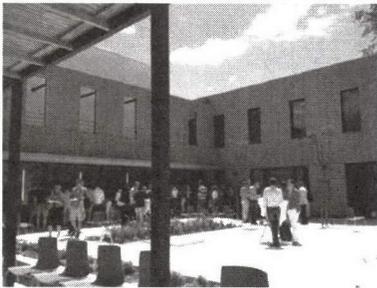


写真3 EuroMov研究所の中庭
（国際会議の昼食時）

私はフランス語が挨拶程度しかできなかったため、被験者の募集には大変苦労しました。学生の中には英語を話せる人もいましたが、基本的にはフランス語しか話してくれません。被験者を募集する際には、モンペリエ第一大学の授業に頻繁に顔をだし、同僚にフランス語で実験内容等を説明してもらいました。その後、興味のある学生にメールをもらい、私のつたないフランス語で実験の日時についてやり取りをしました。メールでは、グーグル翻訳を使って、英語→フランス語へと翻訳していました。日本語→フ

ランス語よりははるかに質の高い翻訳をしてくれるので、とても重宝しました。

フランス渡航期間中には、自分の研究の宣伝も兼ねて、オランダのアムステルダム自由大学や、ドイツのミュンヘン工科大学などでセミナー講演を行ってきました。アムステルダム自由大学は、Human Movement Science誌が創刊された大学です。大学院の授業はすべて英語で行われており、招聘講師としてCoordination dynamicsに関して授業を行って来ました。M.Roerdink博士、C.E.Peper博士、A.Daffertshofer博士らと私の研究について議論して頂けたことは大変貴重な経験でした。またミュンヘン工科大学では、Y.H.Su博士とお会いし、研究についてご示唆を頂きました。

10か月間という研究期間は、本当にあっという間でした。最初の一か月は身の周りの生活環境を整えることや、滞在許可の手続き等であっという間に過ぎました。また8月はバカンスで、誰も研究所にいません。フランス人は、とにかくしっかり休みます。私もフランスでしっかり休むことを（これまで以上に）学びました。渡航中にはエボラ出血熱の流行や、帰国直前のパリでのテロなど（モンペリエでもテロ未遂で逮捕者がでていました）、日本では考えられないような怖い状況もありましたが、多くの方の支えによって公私ともに有意義な時間を過ごさせて頂きました。お世話になった方々に御礼申し上げます。

International Society of Sport Psychology (ISSP)

山越章平・片上絵梨子・實宝希祥（大阪体育大学大学院）

2015年4月19日、20日の2日にわたり、イタリア（ローマ）において、International Society of Sport Psychology (ISSP) が開催された。筆者ら3名は発表者（ポスター）として参加をした。イタリアの首都であるローマは、約3000年の歴史をもち、情緒あふれる町並みを有した都市である。日本と同様に四季があり、温暖な気候であるため、学会期間中はあいにく曇天ではあったものの、過ごしやすい気候であった。ISSPは、1965年4月20日にローマにおいて設立され、今回の国際セミナーはISSP設立50周年を記念し、第1回大会の開催されたローマにて実施された。会場はローマの主要駅であるTermini駅から程近い、Olympic Center Giulio Onestiであった。会場内には、種々の競技に対応した競技場、施設が充実しており、シンポジウムが行えるようなプロジェクター付きの部屋も完備されていた。ポスター発表会場は、フェンシング場の中に設置され、まさに“スポーツに囲まれた中での学会”であった。他にも、喫茶店、レストラン、宿泊施設もあり、参加者は各々充実した時間を過ごせていたように感じる。会場内には芝生の中庭のようなスペースがあり、Coffee breakの時にはテントが設置され、コーヒーをはじめとした各種の飲み物、ケーキやチョコレートなどの所謂ドルチェによるおもてなしで参加者を楽しませていた。

プログラムの内容は、基調講演、シンポジウム、ワークショップ、Round tableと、一般発表であるポスターから構成されていた。ISSP会長であるGangyan-Si氏（香港教育学院）のOpening of the ISSP 50th Anniversary seminarにより、学会は始まった。1日目（4月19日）は、基調講演が行われた後、Parallel Symposiaとして2つの会場において同時に進行していく形式であった。その後の一般発表であるポスターセッションでは、参加者は各々興味の惹かれるポスターに出向き、発表者とのディスカッションを楽しんでいた。ワークショップ、シンポジウムと

続き、1日目のプログラムは終了した。2日目（4月20日）は、ISSP設立から丁度50年の日であり、それを記念した講演から始まった。その後はRound Table、基調講演、シンポジウムと続き、19:30ごろのClosing ceremonyにて「日間にわたる学会は幕をおろした。

ポスター発表

学会初日の午後には、約80演題のポスターセッションがあり世界各国の研究者が発表を行っていた。また、多くの日本人研究者も発表を行っていた。ポスターは主にメンタルトレーニングなどの競技力向上、メンタルヘルスなどの健康心理の分野での発表が多かったように感じる。筆者（山越）が行ったポスター発表は、アスリートの性格とメンタルヘルスに関するものであったが、海外の研究者からの質問の多くは日本の文化に関するものであった。「日本ではどのような考え方を持った人が多いのか?」、「日本の教育や文化、環境が性格に影響していると思うか?」、「日本人アスリートに適した介入方法はどのようなものだと思う?」など、筆者としては日本についてもっと知らないといけなく強く実感した。また、それ以外の質問は、2020年に東京でオリンピック・パラリンピックを開催するにあたっての日本のサポート体制に関するものが多く、自分にとっても大きな刺激となった。今回の学会参加、研究発表を通じて、海外でのスポーツ心理学の動向や情報を得ることができ、とても有意義な時間を過ごすことができた。

基調講演・シンポジウム

学会期間中には様々なテーマに関する基調講演やシンポジウムが開催され、それぞれの講演会場では多くの参加者が集い興味津々に聞き入った。中でも、2日目の午後に行われた、Wylleman氏（ベルギーブリュッセル大学）の基調講演では「Perspectives on

Psychological interventions in elite and Olympic sport」と題して、オリンピックレベルの選手に対する心理的サポートについて話題提供された。スポーツ心理学の実践活動が多様化する中、オリンピックスポーツにおける心理的サポートする実践者に求められる包括的かつ段階的アプローチの重要性の理解、他領域と協同すること、その他実践者としての様々な資質について語られ、参加者は熱心にメモをしたり、スライドを写真に収めたりしながら耳を傾けた。講演は「ベルンでお会いしましょう」という言葉で締めくくられた。2015年7月14～19日スイス、ベルンにて行われる第14ヨーロッパ心理学会においても様々なスポーツ心理学のテーマの研究者・実践者が研究成果の発表や意見交換が行われることが期待される。基調講演終了後、Wylleman氏とお話する機会があり、「2020年東京にてオリンピック・パラリンピックの自国開催を控えた日本にとっても、現場でのスポーツ心理学実践をどう評価するか、そしてその質を高めていくかは重要なテーマでは？」との投げかけに身の引き締まる思いであった。また、競技力向上のみならずアスリートを包括的に捉えて支援することについても言及され、デュアルキャリアの重要性も再認識した。国内外を問わず、学会や研究会に足を運び様々なバックグラウンドをもつ研究者・実践者と意見交換することの楽しさ、大切さを改めて実感することができた2日間であった。

Program

April, 19th

1. Opening of the ISSP 50th Anniversary seminar
2. Keynote Address 「認知神経科学：スポーツ心理学の新たな構築」
3. Parallel Symposia
 - Symposium I 「こころと運動」
 - Symposium II 「身体活動：Social and motivational determinants」
4. Poster session (一般発表)
5. Parallel Session
 - Workshop 「スポーツにおけるNeuro-

technology：運動とパフォーマンス心理学」

→ Symposium III 「スポーツ心理学の応用」

April 20th

1. Anniversary session
2. Parallel Symposia
 - Symposium IV 「メンタルトレーニングへの新たなアプローチ：神経科学の適用」
 - Symposium V 「アスリートのキャリアートランジション研究での課題」
3. Parallel Symposia
 - Symposium VI 「新たなスポーツ心理学コンサルタントのアプローチと方策」
 - Symposium VII 「スポーツのモラル：ドーピング濫用を誘発するケース」
4. Keynote address 「ISSPと国際スポーツ心理学」
5. Closing ceremony

VI. 日本体育学会第66回大会関連

日本体育学会第66回大会案内

I. 学会大会（学会大会委員会）

- ・日程：2015年8月25日（火）～27日（木）
- ・会場：国土館大学

○学会大会スケジュール

8/25	10:40-12:20	口頭発表
	12:30-13:20	理事会
	13:30-15:00	ポスター発表
8/26	09:00-10:20	口頭発表
	10:30-11:30	キーノートレクチャー1
	12:30-14:00	ポスター発表
8/27	10:30-11:30	キーノートレクチャー2
	11:40-12:20	総会
	13:00-15:00	シンポジウム
	15:30-17:00	特別セミナー

<キーノートレクチャー1>

演者：田中美吏（武庫川女子大学）

演題：心理的プレッシャーとスポーツパフォーマンスー運動制御からの理解ー

司会：工藤和俊（東京大学）

<キーノートレクチャー2>

演者：猪俣公宏（中京大学名誉教授）

演題：オリンピック選手のメンタルマネジメント

ー17年間の研究、サポートプロジェクト参加の経験からー

司会：内田若希（九州大学）

<シンポジウム>

テーマ：「ジュニアトップアスリート育成に果たす体育・スポーツ科学研究の役割」

司会：土屋裕睦（大阪体育大学）

演者：勝田 隆（日本スポーツ振興センター）

演者：杉田正明（三重大学）

演者：田中ウルヴェ京（慶應義塾大学大学院システムデザイン・マネジメント研究科博士課程）

<特別セミナー>

テーマ：「ドイツスポーツ心理学の特徴」

司会：杉山佳生（九州大学）

演者：近藤明彦（慶應義塾大学）

VII. 事務局報告

平成26年度体育心理学専門領域 第2回理事会 議事録

記録者：武田守弘

日時：平成26年8月26日(火) 12:00～13:00

場所：アイーナ：いわて県民情報交流センター研修室817

出席者：中込四郎（会長）、関矢寛史（理事長）

今中國泰，磯貝浩久，佐々木万丈，土屋裕睦（学会大会委員）

伊藤豊彦，東山明子，杉山佳生（企画委員）

菅生貴之，森 司朗（広報委員）

武田守弘，田島 誠（庶務・会計委員）

木島章文（監事）

欠席者：（委任状提出）石井源信，内田若希，荒井弘和（広報委員），田村 進（監事）

挨拶（中込会長）

<報告事項>

1. 前回理事会（平成26年度第1回理事会）議事録確認（事務局）

関矢理事長より，前回理事会の議事録の確認が行われた。

2. 会員の異動，会費納入状況，平成26年度会計中間報告（庶務・会計委員会）

田島理事より，今年度の会費納入状況は8/20現在591名であることが報告された。また，平成26年度会計中間報告が行われた。

3. 会報26号（通巻54号）について（広報委員会，庶務・会計委員会）

武田理事より，会報26号（通巻54号）が発刊され会員に送付したと報告された。

4. 第65回大会について（学会大会委員会）

今中理事より，第65回大会ではシンポジウム，キーノートレクチャー1，2の他に，口頭発表20題，ポスター発表68題が行われることが報告された。

5. 体罰・暴力根絶のための検討課題について（中込会長）

学会本部より体育心理学専門領域に対して依頼されている体罰・暴力根絶のための検討課題について，中込会長より，平成26年3月末を第一次報告の締切として報告書を提出したとの報告があった。今後は平成26年12月末を最終報告の締切として報告書を提出すると報告された。

6. 政策検討・諮問委員会について（佐々木理事）

政策検討・諮問委員会委員の佐々木理事から以下の報告があった。日本体育学会では，「政策検討・諮問委員会」を常設し，日本の体育・スポーツに関わる重要な政策的・社会的課題について，学術的立場から審議検討している。この委員会内には1）体育学の展望，2）若手研究者育成，3）ダイバーシティ推進の3つの小委員会を設け，月1回集合し検討している。平成27年1月末を報告の締切として活動している。

7. 学会賞選考について（菅生理事）

菅生理事より学会賞選考について報告があり、17編の選考対象から伊藤豊彦先生が学会賞に決定したと報告された。

8. 学会ホームページ掲載の体育・スポーツ科学情報コラムについて（事務局）

関矢理事長より、学会ホームページに掲載されている体育・スポーツ科学情報コラム(体育心理学)についての紹介がなされた。コラムの執筆には中込会長が当たり、幅広い分野で形成されている体育心理学を総合的なまとめ方で執筆したとの報告があった。（<http://taiiku-gakkai.or.jp/column>）

9. 名誉会員の決定について（事務局）

関矢理事長より、名誉会員の決定について報告があり、石村宇佐一先生、猪俣公宏先生、岡村豊太郎先生、豊田一成先生、橋口泰武先生、平井タカネ先生、山本勝昭先生、吉本俊明先生が名誉会員に選ばれたと報告された。

10. 平成27・28年度体育心理学専門領域選出代議員選挙結果について

関矢理事長より、平成27・28年度体育心理学専門領域選出代議員選挙について以下のように報告された。選挙では山本裕二先生、工藤和俊先生、阿江美恵子先生が選出され日本体育学会へ報告した（女性枠1）。その後、日本体育学会の理事会において、阿江美恵子先生が日本体育学会の理事となっているため、女性の次点である三木ひろみ先生が繰り上げられ代議員に選ばれた。

<審議事項>

1. 平成27・28年度体育心理学専門領域役員選挙結果について

平成27・28年度体育心理学専門領域役員選挙について以下のように報告があり、下記のようにすることとした。会長選挙については阿江美恵子氏が12票で1位となったため、会長を依頼する。理事選挙については上位の土屋裕睦氏、杉山佳生氏、西田保氏、森司朗氏、山本裕二氏、今中国泰氏、岡澤祥訓氏、工藤和俊氏、北村勝朗氏、兄井彰氏の10名に依頼する。なお、理事辞退者が1名出た場合、荒木雅信氏を繰り上げ当選とし、さらなる辞退者が出た場合は次点の3名に対して抽選した結果、内田若希氏、佐々木万丈氏、荒木香織氏の順に繰り上げ当選とする。

2014年度（平成26年度）体育心理学専門領域総会 議事録

2014年（平成26年）8月28日

会場：岩手大学 工学部テクノホール 11:40～12:20

I. 開会の辞

II. 会長挨拶

III. 議長選出

中本浩揮先生（鹿屋体育大学）が議長の指名を受け、議長を務めた。

IV. 報告事項

1. 平成27・28年度 体育心理学専門領域 役員選挙結果

選挙管理委員および事務局より下記の報告があった。

- 1) 開票日：平成26年5月20日（火）15：00～17：45
- 2) 場所：学校法人福山大学宮地茂記念館202号室
- 3) 立会人：関矢寛史・田島 誠・武田守弘
- 4) 投票率：12.0% [会員数680名，投票用紙送付641名，投票者数77]
- 5) 会長選挙：投票総数77，有効投票数72，無効票2，白票3
- 6) 理事選挙：投票総数385，有効投票数364，無効票4，白票17
- 7) 選挙結果（以下，敬称略）

会長 阿江美恵子

理事 土屋裕睦，杉山佳生，西田 保，森 司朗，山本裕二，今中國泰，岡澤祥訓，工藤和俊，北村勝朗，兄井 彰

（阿江美恵子氏は会長当選のため，理事当選者から除外した。その後，9位当選者3名について事務局で公正かつ厳正に抽選した結果，北村勝朗氏，兄井彰氏が選出され，上記の理事10名となった。なお，理事辞退者が1名出た場合，抽選で外れた荒木雅信氏を繰り上げ当選とし，さらなる辞退者が出た場合は次点の3名に対して抽選した結果，内田若希氏，佐々木万丈氏，荒木香織氏の順に繰り上げ当選とすることとした。）

2. 平成27・28年度 体育心理学専門領域選出 代議員選挙結果

選挙管理委員および事務局より下記の報告があった。

- 1) 開票日：平成26年5月20日（火）15：00～17：45
- 2) 場所：学校法人福山大学宮地茂記念館202号室
- 3) 立会人：関矢寛史・田島 誠・武田守弘
- 4) 投票率：12.0% [会員数680名，投票用紙送付641名，投票者数77]
- 5) 投票総数218，白票13

代議員 山本裕二，工藤和俊，三木ひろみ

（女性代議員1名を当領域から選出する規定に沿って，女性得票者1位であった阿江美恵子氏が日本体育学会理事であることから女性の次点であった三木ひろみ氏を選出した。）

3. 平成26年度事業について

下記について事務局ならびに各委員会より報告があった。

(1) 理事会（事務局）

第1回理事会を平成26年4月6日15時～17時に名古屋大学ES総合館1FES会議室にて開催した。また、第2回理事会を平成26年8月26日12時～13時にアイーナ：いわて県民情報交流センター研修室817にて開催した。

(2) 体育心理学専門領域会報第26号を2014年7月20日付で発行した。（広報委員会）

(3) 日本体育学会第65回大会における専門領域の活動（学会大会委員会）

岩手大学にて一般発表（口頭発表20，ポスター発表68の計88），キーノートレクチャー2つ，シンポジウム1つを開催した。

(4) 会員異動（庶務・会計委員会）

平成26年3月の会員数：661名

平成25年3月の会員数：645名

4. 平成25・26年度の体育学研究編集委員の追加について

下記について関矢理事長より報告があった。

体育心理学の投稿論文が増えたことから体育学研究編集委員（体育心理学）を1名増やす旨の連絡が編集委員会からあり，平成26年3月より豊田則成氏（びわこ成蹊スポーツ大学）を編集委員に加えた。

5. 日本体育学会名誉会員について

下記について関矢理事長より報告があった。

平成26年度臨時総会において体育心理学専門領域が推薦した下記8名の先生方が平成27年4月1日付名誉会員に選ばれた。（以下，敬称略）

石村宇佐一，猪俣公宏，岡村豊太郎，豊田一成，橋口泰武，平井タカネ，山本勝昭，吉本俊明
特典として年会費及び大会参加費が無料となる。

6. 体育・スポーツ科学情報コラムについて

下記について関矢理事長より報告があった。

リニューアルされた学会ホームページに体育・スポーツ科学情報コラムが掲載され，中込会長執筆の原稿が掲載された。

7. 学会賞受賞について

下記について菅生理事より報告があった。

平成26年度学会賞を体育心理学専門領域の伊藤豊彦氏が下記論文において受賞した。

伊藤豊彦ほか「小学生の体育学習における動機づけモデルの検討：動機づけ雰囲気認知，学習動機，および方略使用の関連」体育学研究，第58巻第2号，567～583頁

8. 政策検討・諮問委員会について

下記について佐々木理事より報告があった。

日本体育学会では，平成25年度より「政策検討・諮問委員会」を新設し，日本の体育・スポーツに関わる重要な政策的・社会的課題について，学術的立場から審議検討することとなった。体育・スポーツの推進に関わる政策提言やそのための調査・研究を主な任務とするこの委員会に体育心理学専門領域からは佐々木万丈氏が参加し，活動を行っている。

9. 日本体育学会第66回大会

日時：平成27年8月25日（火）～27日（木）

場所：国士舘大学世田谷キャンパス

10. 平成26年度決算中間報告（庶務・会計委員会）

平成26年度の決算中間報告が庶務・会計委員会より報告された。

V. 審議事項

1. 平成25年度決算（庶務・会計委員会）

平成25年度の事業報告ならびに決算報告が庶務・会計委員会よりなされ、承認された。

2. 平成26年度事業計画

平成26年度の事業計画が関矢理事長よりなされ、承認された。

（1）日本体育学会第65回大会における企画運営

（2）体育心理学専門領域会報第26号の発行

（3）第1回理事会、第2回理事会、第3回理事会（新旧理事会）の開催

3. 平成26年度予算（庶務・会計委員会）

平成26年度の予算案が庶務・会計委員会より提示され、承認された。

この時期に総会が開催されるため、当該年度の予算案が事後承認になり理解しにくいという指摘を受けた。そのため、次回の総会（平成27年、日本体育学会第66回大会開催時）では、従来どおり平成27年度の予算案を事後的に審議すると共に、平成28年度の予算案を提示し審議することとした。

VII. 議長退席

VIII. 閉会の辞

体育心理学専門領域 「新旧理事の会」 議事録

記録者：関矢寛史

日時：平成26年12月7日（日）11:30～12:10

場所：大阪体育大学 中央棟（A号館）7階大会議室

出席者：

現役員：中込四郎（会長）、関矢寛史（理事長）、土屋裕睦、杉山佳生、菅生貴之、森司朗、内田若希、
（以上、理事）

新役員：阿江美恵子（会長）、土屋裕睦、北村勝朗、内田若希、工藤和俊、杉山佳生、兄井彰、森司朗、
荒木雅信、山本裕二（以上、理事）

欠席者（委任状）：

現役員：今中國泰、磯貝浩久、佐々木万丈、伊藤豊彦、石井源信、荒井弘和、東山明子、武田守弘、
田島誠（以上、理事）、田村進、木島章文（監事）

新役員：西田保（理事）

【報告事項】

1. 平成26年度総会の議事録を確認した。
2. 第66回大会が平成27年8月25～27日に国士舘大学にて開催されることが報告された。

【審議事項】

1. 平成27・28年度体育心理学専門領域役員について

体育心理学専門領域会則第6条（2）「選挙とは別に事務局から2名の理事を選出し、庶務・会計を担当する」とあるが、平成25・26年度の3名の事務局を平成27・28年度も引き継げるように選挙とは別に事務局として3名の理事を選出した。理事による投票の結果、関矢寛史が理事長となった。また、役員の役割は下記のとおりとなった。

会 長	阿江美恵子
理事長	関矢寛史
理 事	学会大会委員会 土屋裕睦、北村勝朗、内田若希、工藤和俊
	企画委員会 杉山佳生、兄井 彰、西田 保
	広報委員会 森 司朗、荒木雅信、山本裕二
	庶務・会計委員会 武田守弘、田島 誠
監 事	田村 進、木島章文
幹 事	なし

平成27年度体育心理学専門領域 第1回理事会 議事録

記録者：武田守弘

日 時：平成27年4月5日(日) 15:10～17:00

場 所：名古屋大学 ES総合館1F ES会議室

出席者：阿江美恵子（会長）、関矢寛史（理事長）

土屋裕睦，北村勝朗，内田若希，工藤和俊（学会大会委員）

杉山佳生，兄井 彰，西田 保（企画委員）

荒木雅信，山本裕二（広報委員）

武田守弘，田島 誠（庶務・会計委員）

田村 進（監事）

欠席者：森 司朗（委任状提出）（広報委員），木島章文（監事）

挨拶（阿江会長）

<報告事項>

1. 平成26・27年度新旧理事会議事録確認（事務局）

前回行われた新旧理事会の議事録が確認された。

2. 平成27・28年度体育心理学専門領域役員（事務局）

平成27・28年度体育心理学専門領域の理事役員が確認された。今期に関しては会長推薦で事務局に3名を配置することとし（特例），その上で関矢が理事長に選出された。理事の役割分担が確認され，各自の委員会を確認した。

3. 会員の異動，平成26年度決算（庶務・会計委員会）

田島理事より，昨年度の会員数は661名であったが，今年度は3名増の664名であることが報告された。

4. 会報第27号発刊の準備状況（庶務・広報委員会）

武田理事より，会報第27号発刊に向けての現状が報告された。学会関連の原稿はほぼ回収済みであり，今後は研究室紹介，学位論文紹介，海外情報などの原稿執筆適任者を探し依頼することが報告された。原稿回収期限は5月末日としている。

5. 名誉会員の推薦（事務局）

関矢理事長より，本部理事会からの推薦を受けて，池田裕恵先生（東洋英和女学院大学）を体育心理学専門領域としても推薦することが報告された。

6. 体育学研究・IJSHS編集委員の推薦（事務局）

関矢理事長より，以下の2点についての編集委員に関する報告がされた。

IJSHS編集委員として，荒木香織先生，國部雅大先生，山口幸生先生を推薦した結果，快諾された。

体育学研究編集委員として，兄井先生，木島先生，豊田則成先生，西田順一先生，正木宏明先生を推薦したが，体育学研究編集委員会から最終的な編集委員の決定に関する連絡は未だない。体育学

研究における体育心理専門領域の投稿論文数が多いため、委員が5名に満たない場合、増員の要望を検討することとした。

7. 体罰・暴力根絶のための検討課題（事務局）

関矢理事長より、豊田則成先生、岡澤祥訓先生、中込四郎先生が作成に携わった体罰・暴力根絶のための検討に関する最終報告書を提出したことが報告された。内容に関しては回覧した。

8. 政策検討・諮問委員会（事務局）

関矢理事長より、政策検討・諮問委員会についての報告がなされた。佐々木万丈先生が担当しているダイバシティ推進小委員会はH27年6月までの任期であったが、もう一年延長することとなった。佐々木先生が体育心理学専門領域の理事ではなくなったが、ダイバシティ推進小委員会からの推薦で引き続き佐々木先生にお願いすることになった。

9. 役員の追加

平成27・28年度の幹事として中本浩揮先生（鹿屋体育大学）が指名された。

<審議事項>

1. 平成26年度決算（事務局）【資料1】

田島理事より、平成26年度決算案が提案され承認された。また、会計処理が適正であることが田村監事より報告された。なお、木島監事の監査はまだ受けていないため、総会までには監査を受けることで承認された。

2. 平成27年度事業案（事務局）

関矢理事長より、平成27年度の実業案が提案された。ポストセミナーを含む従来通りの事業を継続することが提案され承認された。

なお、今後の事業案と予算案に関しては、平成27年度の総会では平成27および28年度の実業案と平成27および28年度の予算案を提出する。また、平成28年度の総会では平成29年度の実業案と予算案を提出する。なお、H28年度の総会では、進行中であるH28年度の予算案は出さないこととした。

3. 平成27年度予算案（事務局）【資料2】

田島理事より、平成27年度予算案が提案され承認された。プレポストセミナーの謝金代は会計上のシンポジウム謝礼に含むこととし、「シンポジウム謝礼」を「謝礼」に名称変更することとした。その際の金額に関して審議され、キーノートにおける演者のうち体育心理学専門領域会員には10,000円、他専門領域会員20,000円、非会員30,000円（交通費別途）、司会5,000円とした。また、シンポジウムにおける演者のうち体育心理学専門領域会員には10,000円、他専門領域会員20,000円、非会員30,000円（交通費別途）、司会10,000円とした。また、口頭発表の司会（座長）には5,000円とした。いずれも原稿料を含むものとする。演者によっては理事会承認を受ければ増額は可能であることが承認された。

4. 平成28年度事業案（事務局）

関矢理事長より、平成28年度の実業案が提案された。新旧理事会および役員選挙を含む従来通りの事業を継続することが提案され承認された。なお、新旧理事会は11月を予定しており、選挙は代議員と理事の選挙を合わせて行うことで承認された。

5. 第66回大会のキーノート、シンポジウム、口頭、ポスター（学会大会委員会）

土屋理事より、第66回大会のスケジュール案および企画案の大枠が提案され承認された。

シンポジウムは調整中であり、キーノートレクチャーは若手枠とシニア枠の2種類を予定。一般発表の口頭発表は、2つの枠を用意する予定。ポスター発表は2日に分けて開催予定。スケジュールに関してはできるだけ大会組織委員会企画とバッティングしないように検討する。演者の決定については大会委員会に一任することとした。

また、学会大会本部からは他領域との学際的なシンポジウムを期待されているため、第67回大会に向けて学会大会委員会は、他領域との合同シンポジウム等の検討を早めに行うこととした。

6. 第66回大会の専門領域ポストセミナー（企画委員会）

杉山理事より、第66回大会では専門領域ポストセミナーを行うことが提案され承認された。慶応大学の近藤先生がドイツの体育心理学・スポーツ心理学についてレクチャーする予定。名称は杉山理事に一任するが、「特別セミナー」という形で大会期間中に行うこととしプログラムに含める。

ただし、従来通りのプレセミナーは学会大会とは別で行うことを原則とする。

平成26年度収支決算報告

2015.4.2

平成26年度決算報告(自平成26年4月 至平成27年3月)

○収支決算書

款	項目	予算	決算	差額
収入の部				
当期収入合計(A)		1,515,860	1,530,774	△ 14,914
前期繰越収支差額		146,716	146,716	0
収入合計(B)		1,662,576	1,677,490	△ 14,914
支出の部				
当期支出合計(C)		1,371,000	1,383,185	△ 12,185
次期繰越収支差額(B)-(C)		291,576	294,305	△ 2,729
支出合計		1,662,576	1,677,490	△ 14,914

○収入の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・前年度繰越金		146,716	146,716	0	
・年会費		1,320,000	1,328,000	△ 8,000	1千円×662名、1千円×2名(13月31日現在)、H26年度分2名含む
・郵便貯金(利息)		100	14	86	
・体育学会専門領域補助金		140,000	147,000	△ 7,000	
・平成27・28年度代議員選挙送金		55,760	55,760	0	
○収入合計(B)		1,662,576	1,677,490	△ 14,914	

○支出の部

款	項目	予算	決算	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	590,000	596,863	△ 6,863	第26号発行および第27号作成
	印刷費	240,000	239,760	240	第26号
	会報送料	50,000	55,924	△ 5,924	第26号
	原稿料	180,000	165,000	15,000	15名(第26号)+16名(第27号)
	会報送付用封筒代	0	21,804	△ 21,804	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	20,000	0	
	会報等資料のPDF化費	100,000	94,375	5,625	
・学会大会関連経費	小計	70,000	137,460	△ 67,460	第65回大会
	シンポジウム謝礼(司会・演者)	30,000	60,000	△ 30,000	
	会員外交通費補助	40,000	27,460	12,540	
	会場スタッフアルバイト代	0	50,000	△ 50,000	受付、照明・マイク・表示、計時、計19名
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	郵送料、色紙代、文具等	100,000	78,578	21,422	
・事務局事務費	文具、コピー費、理事会弁当等	70,000	23,959	46,041	
・会議費	理事会、委員会開催等費用	330,000	341,586	△ 11,586	
・通信費	会員・理事連絡費	5,000	4,739	261	
・返還金	25年度会費過払いの返還金	1,000	0	1,000	
・当期支出合計(C)		1,366,000	1,383,185	△ 17,185	
・予備費(B)-(C)		296,576	294,305	2,271	
○支出合計		1,662,576	1,677,490	△ 14,914	

△は超過

*会員数昨年度661名から664名へと3名増

平成27年4月2日

この決算書は適正であることを認めます。

監事

田村 進 

木島 秀久 

平成27年度予算案

平成27年度予算案(自平成27年4月 至平成28年3月)

○収入の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	備考
・前年度繰越金		146,716	294,305	△ 147,589	
・年度会費		1,328,000	1,328,000	0	2千円×664名
・郵便貯金(利息)		14	100	△ 86	
・体育学会専門領域補助金		147,000	147,000	0	
・平成27・28年度代議員選挙発送費		55,760	0	55,760	郵送料82円×680名
・当期収入合計(A)		1,530,774	1,475,100	△ 55,674	
○収入合計(B)		1,677,490	1,769,405	△ 91,915	

○支出の部

款	項目	前年度決算	予算案	差額	備考
・専門領域会報関連費用	小計	596,863	501,000	95,863	第27号発行および第28号作成
	印刷費	239,760	240,000	△ 240	
	会報送料	55,924	56,000	△ 76	
	原稿料	165,000	165,000	0	
	会報送付用封筒代	21,804	20,000	1,804	
	謝礼(会報発行作業補助)	20,000	20,000	0	
・学会大会関連経費	小計	137,460	90,000	47,460	第66回大会
	司会・演者謝礼	60,000	60,000	0	
	会員外交通費補助	27,460	30,000	△ 2,540	非会員・専門領域非会員対象
	会場スタッフアルバイト代	50,000	0	50,000	
・記念事業積立金	各種記念事業のための積立費用	200,000	200,000	0	
・役員選挙実施費	郵送料, 色紙代, 文具等	78,578	0	78,578	
・事務局事務費	文具, コピー費, 理事会弁当等	23,959	50,000	△ 26,041	
・会議費	理事会, 委員会開催費用	341,586	250,000	91,586	旅費交通費・弁当等
・通信費	会員・専門領域役員連絡費等	4,739	5,000	△ 264	
・返還金	年度会費の返還金	0	1,000	△ 1,000	平成25年度年会費過払いの返還
・当期支出合計(C)		1,383,185	1,097,000	286,185	
・予備費(B)-(C)		294,305	672,405	△ 378,100	
○支出合計		1,677,490	1,769,405	△ 91,915	

△は超過

編集後記

今回お届けする体育心理学専門領域分科会会報第27号は、新広報委員会になって第1号になります。事務局のご尽力をいただき、発行にたどり着くことができました。

本号の内容自体は例年通りですが、研究活動として、学位論文紹介3編、海外情報2編、研究室紹介、また、昨年の学会関連のご報告などが記載しております。今回は、学位論文の紹介が3編です。このご報告が確実に継続されていることは、体育・スポーツ心理学の研究が日々新しい世代へと進展していていることを示していると感じます。また、私ごとになるのですが、今回海外情報を報告して頂いた三浦先生の訪問先のモンペリエ第1大学に昨年ちょうど訪問した際、偶然にもその時間にその場所で講義をされているという情報をその場で知り、若手の研究者の方たちが世界基準で研究を発展させているのだなあと大きな感銘を受けました。グローバル化というキーワードは、体育・スポーツ心理学の研究領域の飛躍にも重要な視点になるのではないのでしょうか。

一方、日本体育学会第65回大会におきましても体育心理学領域で表表演題数は他領域に引けを取らない数であり、今後の体育・スポーツ心理学の発展において学会での表表演題数の増加は必要不可欠なことであり、本領域の発展にもつながるものかと思われます。そのためにも、今後とも会員の皆さんのご活躍が必須のことと考えます。

最後になりましたが、大変お忙しいところ、限られた時間で、投稿いただきました先生方には深く感謝申し上げます。

広報委員会委員長 森 司朗

日本体育学会体育心理学専門領域会報 第27号 (通巻第55号)

発行 平成27年7月20日 発行(非売品)
発行責任者 関矢 寛史(代表)
発行所 日本体育学会体育心理学専門領域事務局
〒739-8521 広島県東広島市鏡山1-7-1
広島大学大学院総合科学研究科
TEL & FAX : 082-424-6587
E-mail : tshinri@hiroshima-u.ac.jp
URL : <https://sites.google.com/site/jspetaiikushinrigaku/>

印刷 かもめいと有限会社
